
完全記憶能力（禁書目録）があろう（になろう）とバカはバカ

人間狂愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

完全記憶能力（禁書目録）があるう（になろう）とバカはバカ

【Nコード】

N1176Y

【作者名】

人間狂愛

【あらすじ】

インデックスさんに憑依した。普通に授業受けていたはずが、気が付いたら銀髪シスターになっていた。そんな話。

第一節 禁書目録は目覚める。

目が覚めたら身体が縮んでしまっていた。

いや、黒の組織に狙われた訳ではない。私は何処にでもいる女子高生で、先程まで普通に授業を、数学なのに英語が出てくるという意味不明な授業を受けていたはずなのだ。

しかし目が覚めたら何処かの屋上で寝転んでいて、しかも身体が縮んでしまっていた、という訳だ。

更に付け加えなければいけない不思議がもう一つある。身体が縮んでしまったと言ったが、実は完全に別物に変化してしまっていたのだ。

自慢の艶のある黒髪は腰まである銀髪に、狸みたいな黒眼はまるでエメラルドのような碧眼に、その胸の大きさだけは羨ましいよと褒められた(勘違い)巨乳はぺたんこに、しかも裸の上に修道服という変態コスプレまでしていたのだ。

そう、私はIndex-Librorum-Prohibitiorum(禁書目録)になっていた。うん、あのイカにそっくりな「インデックス」さんだ。インなんたらかんたらさんだ。落ちていたガラス片で確認したから間違いない。

そしてその事を自覚した私はインデックスの記憶を引き出せるようになった。10万3000冊の魔導書の知識、それを読む為の様々な言語、それ以外にも今まで知らなかった特殊な知識も手に入ってしまった。

流石完全記憶能力。私の豆みたいな脳みそには三文字以上の外国語なんて入力すら困難だったが、彼女の脳は今この瞬間見ているものすら全て記憶し、その気になればいつでも引き出す事ができる。思い出す事ができてしまう。

だが私は彼女の記憶を全て継承した訳ではない。何故かエピソード記憶は引き出せないのだ。

此処に来るまでの流れももちろん思い出せないし、それ以外の彼女特有の思い出も何一つ存在しない。

こんな場所においてリセットされたばかりという事は有り得ないし、つまり個人的な記憶は私に受け継がれなかったという事だろう。

いや、少し閃いてしまった。私には自分自身の記憶がちゃんとある。先生に「お前がこの高校に受かったのは奇跡だ。確かにウチは県内最底辺の学校だが、小学生以下のお前が合格できるはずがないんだ」と言われた記憶もしっかり残っている。

今思い出したらムカついてきた。いくら私でも中学生ならわからないが、小学生程度には負けるはずがない。

あ、私立は勘弁な。

いや、そんなどうでもいい話は置いておこう。とにかく私は脳がないのに記憶がある、思い出を持っているのだ。

それはつまり思い出みたいなのは魂にも記憶され、脳にある記憶はその魂を持つものにしか引き出せないという事ではないだろう

か。

「なるほど……私って天才かも！」

自分で考察して自分で納得し、自分で自分を褒める。声も口調もちゃんとインデックスボイス　ってあれ？

「なんか言葉が勝手に変換されちゃうかも」

考えをそのまま言葉にしようと口から出してもインデックス口調に自動的に変換されてしまう。確かに私は「なんか言葉が勝手に変換されるんだけど」と言っただけなのだが、これはインデックスの呪いだろつか。

「むむむ、……ぶりっこみたいで正直いやかも」

かもなんて曖昧じゃなくて確定だ。私はこんな個性（枷）なんかいらぬ。普通（自由）が一番いい。

「私は負けないかも！」

気合い十分。私は拳を握りしめ空高く突き出して、新たな決意を胸に宣言した。

『あー、もういいかな？』

「な、なにヤツ!？」

突然、背後から男の声で紡がれる流暢なブリティッシュ・イングリッシュ（イギリス式の英語）が聞こえてきて、私は警戒しながら

振り向く。

ちなみに一口で英語と言ってもいろいろ種類があつて、大きく分けるとイギリス等の標準英語、アメリカの標準英語、カナダの標準英語、オーストラリア等南太平洋の標準英語、カリブ海諸国の標準英語、アフリカの英語（標準化中）、東アジアの英語（標準化中）、南アジアの英語（標準化中）の八つだ。

ちなみに日本人が勉強しているのは今はアメリカ式の英語で、昔の私は一つ一つの違いがわかる以前に、そのアメリカ式の英語すら挨拶が言えるぐらいで精一杯だった。

本当にインデックスすごい。アニメだとかなり邪魔なニート、小説だと少し邪魔なニートだったけど、天才とかそういうレベルじゃない頭脳をしている。

『おや、敵の声を忘れるなんて随分暢気なんだね？』

突然現れたのは原作キャラだった。金髪から染めたらしい真っ赤な長髪、アホみたいにバーコードみたいなタトゥーを刻んだ顔面、ピアスやアクセをじゃらじゃらとチャラ男のように装備、2メートルはありそうな身長、そして似合わない神父服を着て、口に煙草を啜え、煙の臭いと過剰な香水の匂いを振り撒くイギリス人。

彼の名前は

「ステエエイルウウウ・マグヌスウウツ！！！！！！」

『えっ』

そんな名前の残念シヨタだった。

第一節 禁書目録は目覚める。(後書き)

性格が悪い無神論者の主人公ばかり書いてるから逆に性格の良い有神論者を書いてみたくなったので、普通に女の子で書きたくなったので、恋愛要素がある作品を書きたくなったので、前から書いてみたかった憑依もので書いてみた。

ちなみに上条×インデックスしか認められない人がいれば読むのはやめた方がいいと思います。

一方さんや上条さん憑依ばかりだし、インデックスさん憑依。インデックスのボーギャくぶじんな行動は全部誰かの為の行動らしいけど、どう考えても自己中ですよね。

オリ主が憑依したインデックスさんは馬鹿だけど優しく、最終的には一番正しい位置にいる。そして上条さんの説教を奪って敵を説得しちゃう。そんなキャラにしたいです。

第二節 禁書目録は落ちる。

「た、確か名乗っていないはずだが何故名前を？ もしかして記憶が？ いや、それは有り得ない。有り得るはずがないんだ。僕がこの手で」

「日本語で話してほしいかも」

「えっ、あ、はい」

昔の私のクソみたいなヒアリング能力では理解できなかった流暢な英語も理解できるようになっているが、やっぱり慣れ親しんだ日本語の方が好きなのでお願いしてみると、彼は素直に日本語に直してくれた。

本当はインデックスたん大好きだもんね。

「って、そうじゃない！」

えっ、違ったっけ。

「僕達は敵同士。僕は君を狙い、君は僕に狙われている。そんな関係の僕達が仲良くお喋りなんて……」

ステイルは戸惑いながらも、当初の目的を、自分がやるべき事を思い出して気分を変える。

どうやら私の心の声に反応した訳ではないらしい。

さて、ステイルが私を狙っている（フリをしている）という事は、まだ原作前で上条さんとも出会っていないくて、首輪付きという事か。

あれ？ やばくない？

もしもの未来を考えてみよう。ステイル達に捕まる イギリスに連れて帰られる 記憶をリセットされる。

私ごと消えちゃうんじゃない？

「超ヤバイかも！！！」

「！？」

突然叫んだ私に驚いてステイルはビクつくが、今の私にそんな事に構っていられる余裕はない。

どう考えても死亡フラグだ。しかもここで私が捕まったら救われないのは私だけではない。

私がこのまま上条さんに会わないままイギリスに連れて帰られてしまったら上条さんの存在も知られないまま、つまりアウレオルスは倒せないし姫神は死んでしまう。御使墮し（エンゼルフォール）を発動した術者として上条さんの父親も殺される。闇咲さんが救おうとした女性も救われない。それから起こる事件でも救われない人達がたくさん出てくる。

上条さんが主人公として魔術に関わって活躍する物語はインデックスが存在しないと関われるはずがない。

魔術サイドでは上条さんでなければ救われない物語がたくさんあった。科学サイドではインデックスがいなければ救いまで進まない話があった。

私だけの問題じゃない。一步間違えれば学園都市がローマ正教に支配されたり、イギリスでクーデターが成功したり、いろんな問題が起きるかもしれないとか、ついさっきまで普通に女子高生やってた人に降り懸かる問題じゃないよね。

……上条さんじゃなくてインデックスになって良かった。

「考え事の途中らしいが、敵である僕が素直に待つてくれるなんて考えているのかな？」

「ちよつと待つててください」

「あ、はい」

となると問題は目の前の上条さん負ける為に、能力説明、魔術体験の為に作られたただけど作者が気に入ったからその後活躍し続けたんだろつなあ、とか私が思っていた残念シヨタだ。

彼を攻略してさつさと上条さんハウスまで逃げ込んで首輪を破壊しなればならない。

しかし歩く教会で防御は問題ないが、攻撃手段がない。スヘルインターセプト強制詠唱シエオールフィアや魔滅の声みたいな魔力なしでも使えるのは知識にあるが、一発で成功させる自信がないし、魔滅の声は条件が厳しく相手が一人なら使えない。

そうになると、心苦しいけどこれしかないよね。

「ステイル？」

「うん？ そろそろ始めてもいいのかい？」

「かおりは何処？ 早くイギリスに帰ろうよ」

「なっ ！？ インデックス、まさか記憶が？」

私が笑顔で尋ねるとステイルは狼狽し、目を丸くする。口を大きく開けて、間抜けな表情で私を見つめる。

「うん、ちゃんと覚えてるんだよ！」

「インツ……デックス……」

ステイルは涙を流し膝を付く。叶わないと思っていた幻想が、絶対に有り得ないと諦めていた夢が叶った。彼は今そう考えているんだろっ。

「ステイル……」

私はそんなステイルにゆっくりと近付いていく。白い修道服を風でひらひらとさせながら彼の目の前まで歩いていく。

「……おかえり、インデックス」

「ごめんね、ステイル」

「えっ？」

「えいつ！」

「はぐあっ」

金的。男性の急所。私はそこをおもいつきり踏み付けた。

経験はないので痛さはわからないが、確か鍛えられないという話だし、昔そこを蹴られた空手の全国大会優勝者、西本くんが絶叫していた事から最も効果的な攻撃手段であると考えて実行した。

そしてステイルは口から蟹のように泡をぶくぶくと噴き出して倒れた。

「主よ、我等が父よ。私は自分が助かる為に、人の心を弄ぶという悪事を犯しました。それは許されざる事です。しかし私にはやらねばならぬ事があるのです。どうか私の身勝手をお許しく下さい」

目を閉じて両手を組み、両膝を地に下ろし告白する。ぬか喜びさせてしまつてごめんなさい、ステイル。

「よし、行くんだよ！」

がばつと立ち上がり、膝についた汚れを掃う。そして私は駆け出しました。

「何処へですか？」

しかし目の前に現れた人物によって、私は足を止めざるおえなく

なった。

「ステイルがやられましたか。しかし、どうやって彼を倒したのかは知りませんが、私はそう簡単にいけませんよ？」

神裂火織。厨二過ぎる名前だが実力は本物の魔術師。神を裂くなんて名前のくせに世界に20人といないとされる、生まれた時から神の子に似た身体的特徴、魔術的記号を持つ【聖人】。偶像の理論により『神の力の一端』をその身に宿す事ができるデタラメ人間。不完全な現出に加えて神戮準備中だった神の力と互角に渡り合った（ガブリエルは本来の力を全く発揮できなかっただろうがそれでも魔術師や超能力者を含む人間には普通はできない行為）イギリスで十指に入る魔術師。幸運EX。

世界のアスリート涙目な身体能力とマサイ族（マーサイ族）並の視力を持つ化け物からどうやって逃げれば良いのでしょうか。

「み、見逃してくれたりは」

「有り得ません」

「ですよー」

私の提案という名の悪あがきは即答で却下された。

戦えない人間に、保護しなければいけない人間に、しかも大切なインデックスに聖人の力を全力で振るう事はないのだろうか、それでも大ピンチだ。

魔力が使えるば、インデックスの魔神のごとき力で神裂すらも圧

倒できるのだろうが、首輪と自動書記ヨハネのペンに使われている魔力のせいで、私は自分の魔力を使用する事はできない。

まあ、知識があっても経験はないから使えないだろうけどね。

助けて上条さん！

「では貴方を回収させていただきます」

心の叫びはヒーロー（上条さん）には届かない。

ああ、やっぱりステイルに騙し討ちなんかしたのが良くなかったんだ。主が私を裁こうと神の子を送ってきたんだ。

「ごめんなさい、お父様。」

「できれば抵抗はしないでただければ幸いです。あまり手荒な真似はしたくないので」

「そう思うなら見逃してほしいんだよ！」

「ダメです」

「絶対絶命かも」

かもではなくて断言。もし逃げる事を選択しようとしても此処は屋上だから神裂の後ろにある階段から逃げなきゃいけないし、それがもし成功しても神裂の脚力だとすぐ追い付くだろう。戦う事を選択しても攻撃手段はぶつつけ本番、更にたとえ上手く魔術や聖人の力を封じても、元の体力や筋力的に勝てない。

でも黙って捕まる選択は有り得ない。さっき考えた災厄が起こる可能性が高いのだ。見ず知らずの人間で、しかもインクでできた存在なのかもしれないが、私には見捨てる事なんてできない、できるはずなんてない。

「……………」

ちらりと後ろを見る。安全を考えた冊もしてないこの屋上なら飛び移って逃げる事ができるかもしれない。逃げる手段を選ぶならそれが最適で最善なのかもしれない。

でも怖い。こちらら数分前までただの女子高生だったのだ。荒事慣れどころか、そんなスタントマンみたいな真似などした事があるはずがない。これからもする事なんてなかったはずだ。

しかし、神裂を突破するなんて今の私には不可能だ。ペンデックスたんモードになればいいが、発動条件に今回は該当しない。

「ええい、女は度胸なんだよ！」

「な、何を!？」

私は飛んだ。

そして私は落ちた。

第二節 禁書目録は落ちる。(後書き)

ぶっちゃけた話、手元に禁書目録一巻だけ無いまま書いているので設定間違いとか多々ありそうです。

でもネギまは毎週のマガジンで読んだ記憶だけ、ゼロ魔はアニメの知識だけで書いているのでなんとかなるんじゃないかと思っています。

しかし気が付いたらペンデックスたんモードになって虐殺ルートを書こうとしている自分がいて怖い。

第三節 禁書目録は出会う。

インデックス落ちる 落ちる 落ちる インデックス落ちる さ
あ、どうしましょう

どうしようもありませんでした。

結局私は屋上から屋上へと飛び移る事に失敗し、結果、そのまま落ちてしまった。真つ逆さまに墜落していった。

そして恐怖で気絶し、朝、気が付いたら原作と同じく布団のようにマンションのベランダに干されていた。どうやら上手く引っ掛かったみたいだ。しかも神裂はステイルの容態を心配したのか、回収に来なかったのだ。

なんてラッキーな。上条さんだったら落ちてスプラッタになって再生たがんできるしたら、その瞬間に捕まってるはずだ。インデックスで良かった。でも欲を言えば守られるヒロインじゃなく、戦うヒーローになりたかった。もちろん性別はそのままです。

でもインデックスだったからたぶん助かったんだ。それを今は喜んでおこう。

とりあえず引っ掛かったままで待機しているが、結構な高さから落ちたはずの身体は何処も痛くない。流石は歩く教会チートだ。

「ああ、主よ。この幸運に感謝致します」

両手を組んで落ちないようにバランスを取りながら祈る。良い事があつたら全て神様のおかげ、悪い事があつたら全て自分のせい、それが宗教関係者。

「ふっふっふ、それにしてもまさか原作通りベランダに引っ掛かるなんてとんでもなくラッキーなんだよ！　あとは布団を干しに来たかみじょうさん（何故か漢字にできない）に首輪を破壊してもらっただけなんだよ！」

私はにやにやと怪しげに笑う。

もちろん上条さんの記憶は守るつもりだ。自分の身勝手に誰かの記憶を奪う事になっていいはずがない。記憶を失う事は死ぬ事だ。生きていく上で経験を、記憶を蓄積して成長していくのに、それを失ってしまったら、死んで生まれ変わったのと同じ事だ。全くの別人だ。

私は上条さんに死んで欲しくはない。確かに鈍感でラッキースケベを起こしまくって自業自得なのに不幸とか言う女の敵な浮気性野郎だけど、私は誰にも死んでほしくなんてない。たとえこれが夢の世界だとしても誰かが死ぬのは絶対に嫌だ。

私は全て救えるなんて考えていない。でも目の前で起きている事、私を知っている悲劇は止めたいんだ。

「どんな悪人でも死んでいい人なんて存在しないんだよ」

うんうんと私は一人で頷く。

私は全てを救えるなんて思っていない。むしろ自分が誰かを救えるなんて傲慢な考えはしていない。

それでも誰かの助けに、自分で自分を助けるお手伝いができればいいなあ、なんて考えているんだ。

「ああ？ 死んだ方がいい悪人なんているに決まってんだろオが。つかオマエ人家のベランダで何やってんだ？ 新しい襲撃方法ですかア？」

……あれ？

「おいおいおい、この俺を無視するなんていい度胸してんじゃねえか。死ぬか？ オマエ」

私に聞こえてきたのは上条さんの情けないヒーローボイスではなく、悪魔のようなデスボイスだった。

私はふるふると震えながら半泣きで顔をあげる。上条さんがデスメタルに目覚めちゃった事に期待しながら私に話し掛けてきた人物の顔を見る。

「よオ、おはよオございまアーすってかア？」

けれど、その絶望的な期待は当然のごとく叶う事はなかった。

あ、死んだ。バッドエンドだ、これ。

にやにやといやらしく笑いながら悪魔のように微笑む白い死神。能力の弊害で後天的にアルビノとなった中性的な少年。230万人の学生の頂点。能力者の6割弱が無能力者（レベル0）の中、学園都市で七人しかいない最高レベルの能力者、超能力者（レベル5）の一位に君臨する男。一人で軍隊を相手に戦えるどころか、世界を敵に回しても勝てるであろう最強。ベクトル操作というチート能力を持ち、魔術や意味不明なもの以外何でも完全に反射や操作ができる1万人以上を殺した大量殺人鬼（予定）。ただ一人レベル6になれると言われている無敵を目指すヒーローになりたかった子供。将来的には黒い翼や白い翼と天使の輪も使えるようになる理解できない化け物。

アクセラレータ
一方通行が何故か目の前で笑っていた。

「お、おおおはようございますなんだよ！ ああ、あの私はあれなんだよ、通りすがりのききき気にする必要が皆無なシスターさんなんだよ！！ ビルからビルに飛び移ろうとして、ししし失敗して此処に来てしまったただだからかららら食べないでくださささいっ！！！！！！」

私は今にも失禁しそうになりながら、蒼白な顔で震える声を出した。

一方通行は化け物だ。今のところ怪我もしていないから物理的な攻撃や超能力相手なら無敵を誇れるだろう。

しかし警戒すべき一番のものはその能力ではなく彼の頭脳だ。未元物質や魔術など、自分が知らない法則であろうと逆算して理解し、時にはそれすらも利用できる天才的な頭だ。

スパコン並の計算力と、複雑な計算式を一瞬で記憶する記憶力、そして先程述べた応用力もある天才には歩く教会も破壊されてしまいかもしれない。

「はア……？」

しかし一方通行は私がおもいつきり警戒（恐怖）しているのに、襲い掛かってくるような気配はなかった。

私はチャンスだと思い、一気に畳み掛ける。

「あ、あれなんだよ。もし殺さないなら何でもするんだよ！ か、かか身体はシスターだから捧げられないけど、精一杯ご奉仕でも何でもするんだよ！ だから助けてください！！」

私は必死だった。必死乙とか笑われても怒らないぐらい必死だった。上条や打ち止め（ラストオーダー）に出会っていない、今も毎日クローンを殺し続けて心が麻痺している彼に、本当に死ぬかもしれない恐怖にビビっていた。

ああ、顔も知らない天国のお父様、お母様、インデックスのお父様、お母様、そしてインデックス。ごめんなさい、私はこれから目の前の野獣に汚されます。ロリコンだと噂だった彼ならきつとシスターにだって容赦はしないでしよう。

上条さんじゃないけど不幸過ぎる。起きたら捕まえられそうになって、なんとか倒したらまた次の敵が来て、逃げられたと思ったらラスボス 泣きたくなるんだよ。

エリ・エリ・レマ・サバクタニ（我が神、我が神、どうして私を

見捨てられたのですか。)

「うつつ　ぐすっ、せめて　優しくして、ほしいんだよ」

「オマエみてエながキに欲情する訳ねエだろオが」

「えっ………?」

泣きながら懇願すると、一方通行は不機嫌そつな表情で吐き捨てるように言った。私はそれを聞いて驚く。

ロリコンじゃなかったの？

「何でもするか……、ならオマエは俺の所有物だよなア？」

えっ、やっぱりロリコン？

「ならさつさと俺の前から消え失せろ」

そつ言つて彼は私の額を押した。

「ちよ、えっ、ま　待つてほしいんだよ！　こつから落ちたら

」

私は慌て出す。むしろ私の方から喜んで彼の前から消え去りたいが、ここから落ちたら、また気絶するかもしれない。てゆうーか怖いから落ちたくない。

それに一応無傷で済むだろうが今度こそイギリス清教に回収されてしまうだろう。ステイルと神裂が私を連れて行ってしまっだろう。

それは困る。超困る。

私にはこの街でやらなければいけない事がたくさんたくさんあるのだ。

こんなギャグみたい（本来ならスプラッタ）な終わり方を認める訳にはいかない。私がインデックスになってしまったせいで悲劇に躍らされてしまう人を増やしてしまう訳にはいかない。

だから私は必死に抵抗する。怖い怖い悪魔のような男の、簡単に私を即死させられる皮膚を、右手を掴む。

「うるせエンだよクソガキ」

「あ、あ、あーっ」

しかし抵抗虚しく、また私は落ちていくのだった。

これが噂の落下系ヒロインか。

第三節 禁書目録は出会う。(後書き)

禁書目録は二度落ちる。

私はぶんすかぴーと怒りながら喚くが、彼はベランダに現れる気配がない。

「でも私生きてる、無事に生還したんだよ！」

泣きながら喜ぶ。人間としても乙女としても私は生き残ることができた。主は私を見捨ててなんかなかったんだ。

あとは上条さんに首輪を破壊してもらえば、そして学園都市に残る事になれば、私は自分のせいで大変な事になるという重圧プレッシャーから解放される。

「……って、肝心のヒーローの居場所を知らないかもっ！！！」

ここで私は重大な事に気付いた。上条当麻の住んでいる学生寮が何処にあるか知らない。ソコが何学区なのか、ココが何学区なのかも知らないのだ。

「あ、でも……」

私は思い出す。一方通行が打ち止めに出会う寸前に上条さんの寮のすぐそばを通って家に帰っていた事を、インデックスの記憶（知識）ではなく、私の記憶（思い出）だから曖昧だけど、確か上条さんとインデックスがうるさかったから音を反射したのだった。

とりあえずこの学区を手当たり次第歩き回ろう。そうすれば上条さんにも会えるはず、彼が不幸だというのなら私の不幸にも関わってくるはずだ。それに何よりアレキスターはプランの為に私を上条インデックス当麻に出会わせなければいけない。だから出会えないはずはないのだ。

「よし、さっさと行くんだよ！」

「何処へだい？」

あ、デジャヴユ。

「自分でもよくわかっていない断片的な情報から虚言を吐いて騙し討ちなんて恐れ入ったよ。君の記憶が戻るなんて有り得ないのに騙された僕も僕だけどね」

素敵な谷山紀章さんボイスに私は振り向く。

「でももう騙されないよ。頭の良い君なら既に気付いていると思うが、確かに僕と神裂はかつて君の仲間だった。でも今は」

決意の瞳を燃やす身長2メートルの十四歳。

「僕達は君の敵だ」

またしてもステイル・マグヌスが現れた。

なんだろうこのエンカウント率。てゆうか別れの負担を軽くする為に敵を装って追跡するとか、貴方達が好きなインデックスはもう死んでいて（記憶リセット&私が憑依的な意味で）、これから私と上条さんでインデックスの身体を救うんだから見逃してください。

却下されるだけだろうから言わないけど。

私はちらちらと辺りを見回し、一方通行が助けに来ないかなあ、なんて無駄な有り得ない期待をする。

「ああ、人払いのルーンを刻んであるから誰かが来る事はないよ」

見張っていたのだろうからそれぐらいの対策がしてある事は予想済みだ。

「さて、準備はいいかな？」

放り捨てた煙草のラインをなぞるように3000度の炎の剣がニコチン中毒不良神父の手に宿る。

これは私も覚悟を決めて戦う（逃げる）しかないようだ。

「……Dedicator 545（献身的な子羊は強者の知識を守る）」

ステイルは自身の殺し名である魔法名を名乗らなかったが、私は名乗る。

これは覚悟だ。私がインデックスとして自分自身を救う為に抵抗する決意の表れだ。

ぶっつけ本番だろうが何だろうかステイルを退けて上条さんに会いに行かなければならない。だからやるしかないのだ。

「行くんだよ！」

私は走り出す。

ステイルの魔術は全て守る為のもの。ルーンを配置しなければならず、しかも範囲内でしか使えない。更に彼は体力や接近戦能力を犠牲にしている。逃げの一手なら成功する可能性も高い。

「逃がすかつ!!!」

私に向かって炎剣が伸びてくる。

「A A T R (狙いを右へ)」

しかし私の強制詠唱スベルインターセプトによってそれは右にズレていった。

ノタリコンを利用した相手の魔術に対する妨害。早口言葉や暗算などの作業をしている人の耳元でデタラメな言葉を言って混乱させるようなもの。はじめての行使になるが、それは見事成功した。

「ちっ
」

ステイルは舌打ちしながらまたしても攻撃してくるが、私はそれを時に避け、時に妨害し、失敗しても歩く教会の加護で無傷なまま走っていく。

歩く教会の加護に頼り過ぎない為に強制詠唱を使ったのだが、もしかしてもっと頼っても大丈夫かな。

少し余裕の出てきた私は調子に乗り出す。そろそろ効果範囲内から抜け出せる。

「灰は灰に (Ash To Ash) 塵は塵に (Dust To Dust)
吸血鬼殺しの紅十字 (Squeamish Bloody Road) ! ! !」

しかし目の前を横切った炎の道によって、私は立ち止まってしまった。

「そう簡単には逃がさないよ。神裂にまた怒られてしまうのも嫌だしね」

恐怖 それは簡単に消えるものではない。歩く教会で守られるのがわかっていても、私はその感情によって躊躇ってしまった。

炎を掻き消しながら、歩く教会の加護を信じて突っ込むべきだった。でもそれはもう遅い。

ステイル・マグヌスは私の一瞬の間隙について逃走経路に立ち塞がり、私は逃げ道を失った。

「魔術を使えば君は強制詠唱で僕を妨害するだろうからね。悪いけどおとなしく捕まえさせてもらうよ」

ステイルは炎剣を消し去りながら私を見る。

詰んだ。詰んでしまった。私が覚悟を決めて全力で逃げようとした事は呆気なく簡単に簡潔に完全に終わってしまった。もう騙し討ちは通用しないだろうから私は手段を失ってしまった。

私は炎剣を反らすのではなく、爆発させたりしてステイルを傷付

けてでも逃げるべきだった。

後悔は終わってしまったからしかできない。この反省を活かして次になんてイギリスに連れて帰られれば、記憶（私）が消されてしまえばもう無駄でしかない。

人払いのルーンで目撃されないようにしながら私を捕まえ、彼は学園都市から離れていくのだろう。叫んでも、もがいても、それはきつと無駄に終わるのだろう。

「……さあ、行くうか」

ステイルは何処か悲しい表情をしながら私に近付いてくる。

結局私はインデックスとして生きる事すらできなかったという事か。私にはインデックスのように最後まで諦めずに信じ続けるなんて不可能だ。

腕を捕まれながら私は唇を強く噛み締め、声も出さずに涙を流しながら、私は完全に諦めてしまった。

「ごめんなさい。」

「おい、てめえ何してんだよ」

えっ、この声は……。

「その娘から手を離しやがれ！」

その時、ヒーローが現れた。ウニのようなツンツン頭の少年は、

本当にヒーローのようにちょうどいいタイミングで現れた。

私は涙で霞む視界で声の主を見つめながらこの幸運を父に感謝する。

「聞こえてねえのか？ さっさと離せって言ってるんだよ！」

ヒーローは、上条当麻は、ステイルを睨み付けながら力強く叫んだ。

第四節 禁書目録は戦う。(後書き)

最近ラテン語とかノタリコンとか難しい事を小説の為に勉強しなきゃいけない事が多い。

第五節 禁書目録は見つめる。

私は運が良い。ステイルは運が悪い。上条さんとはびつきの不幸だ。今から魔術師という自分が知らない存在と戦う事になる。

「学園都市の人間か？ どうやって此処に来たんだ いや、それよりも現場を見られたのがまずいな。ルーンで記憶を改変するか？」

ステイルは予想外の自体に慌て出す。

元々魔術サイドの人間が、科学サイドの人間に接触する事は、些細な事でバランスを崩すキツカケになってしまう可能性があるからあまり許される事ではない。

けれどインデックス（私ではない）が学園都市に逃げ込み、それを追いついて学園都市に入り、そして彼等は今日まで魔術師として学園都市の人間に接する事なく過ごしてきた。

しかしその努力は崩れさるかもしれない。ステイルの前にいる彼が能力でインデックスを助ける為に戦うというのなら、接近戦能力がないステイルは魔術を行使しなければならぬ。インデックスを渡す訳にはいかない。

だから彼は今心の中ではすごく慌てているだろう。

「ごちゃごちゃうるせえんだよ！ 俺はその子を離せって言うてんだ。さっさと解放しやがれ！」

しかしステイルの悩みは無駄な事になる。アレイスターにとって

はプランの内、戦争など起きるはずがない。

上条さんは拳を強く握りながらステイルに叫ぶ。

「どつやら争いは避けられないみたいだね」

「うおおおおお！！！」

そして上条さんは飛び出した。ステイルを殴ろうと拳を振り上げた。

「なっ」

しかしそれは炎の壁で妨害されて届かない。炎が得意なルーン魔術師、ステイル・マグヌスが作り出した炎剣の応用で、上条さんの前に炎の壁が出現する。

「邪魔だ！！！」

「ば、馬鹿なっ！！？」

でも、それでも上条さんには無駄だった。神様の奇跡だろうが何だろうが、異能の力なら打ち消せる右手によって、ステイルの炎は甲高い音と共に消え去った。

「おらあっ！！！」

「ちっ！！」

上条さんが右手でステイルの顔面を掛けて殴ろうとするが、ステ

イルはその右手を紙一重で避ける。

しかしその時、私を掴んでいた彼の腕が私から離れた。私はその隙について走り出す。

「しまっ」

「よそ見してんじゃねえ!!」

そして上条さんの左手がステイルのお腹にクリーンヒットした。

「ごはっ!?!」

ステイルはくの字に折れ曲がりながら後ろに吹き飛んだ。

上条さんはその様子を見終えると私に振り返り笑い掛ける。

「大丈夫だったか?」

太陽のように優しい笑顔。それを見て私はこの世界に来てからはじめての安心感を感じた。

「ありがとうなんだよ!」

私は涙を拭いながら精一杯の笑顔で返す。

やっと見付けた。これで私は救われるのだ。

「って、危ないんだよ!」

「えっ？」

「灰は灰に (Ash To Ash) 塵は塵に (Dust To Dust) 吸血鬼殺しの紅十字 (Squeamish Bloody Road) ! ! !」

ふと、上条さんの後方、ステイルがいた場所を見ると、彼は既に立ち上がっていた。そして炎剣を追加して、上条さんに向かって投げ付ける。

私は慌てて叫ぶが上条さんは後ろから迫る危険に気付いていない。

「T T T L (左方に歪曲せよ) ! ! !」

間一髪。私の強制詠唱が間に合い、炎の十字架は上条さんの右で爆散した。

「あ、あぶねえ……」

「油断しちゃダメなんだよ！」

「お、おう、サンキュー」

「ううん、助けくれてありがとう。もうダメかと思ったんだよ」

上条さんはステイルに視線を戻し、彼の健在を確認すると、直ぐさま再度警戒する。

そして私も同じようにステイルと向き合いながら隙だらけの構え(自分では武術家みたいに格好良いポーズのつもり)で警戒する。

「魔術を打ち消す不思議な男と魔力を使わず魔術に干渉するインデックスか。厄介だね」

それに対してステイルは余裕の表情で構えもせず、煙草を吸い始める。

「魔術だあ？ ただの発火能力パイロキネシスだろうが。不良神父さんは厨二病なんでせうかあ？」

「実際にステイルは十四歳だけど魔術はあるんだよ。まあ、後で証明でも何でもしてあげるから今は超能力の亜種とでも考えておいて」

「りょーかいッ！」

上条さんは言葉と同時に隙だらけのステイルに向かって駆け出す。

「世界を構成する五大元素の一つ（M T W O T F F T O）、偉大なる始まりの炎よ（I I G O I I O F）。それは生命を育む恵みの光にして（I I B O L）邪悪を罰する裁きの光なり（A I I A O E）、それは穏やかな幸福を満たすと同時（I I M H）、冷たき闇を滅する凍える不幸なり（A I I B O D）。その名は炎、その役は剣（I I M N I I M S）。顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ（I C R M M G B P）」

私の強制詠唱と同じようにノタリコンを用いた高速詠唱。ステイルの最高にして最強の秘術。ルーンを破壊しない限り復活する教皇クラスの魔術。

「 行け、『魔女狩りの王』」
イノケンティウス

その意味は必ず殺す。彼は先程のような油断はせず、ついに本気を出すようだ。

つて、やばい。スプリンクラーなんて存在しない屋外では、しかも対魔術師戦の経験がない上条さんに、原作では嘸ませ犬扱いだけど本物の天才のスタイルは倒せない。

これは私がイノケンティウスをなんとかしなきゃ。

「I C E B U T G O A F (爆散せよ、炎の巨人)
!」

「うおおおお!!!!」

私は一瞬でも隙を作ろうとイノケンティウスへの妨害を強制詠唱で行うが、上条さんはそんな私の苦勞も知らず、右手でスタイル目掛けて掛けていく。

そしてそんな上条さんの前にイノケンティウスが立ち塞がった。

「な、なんで何も効果がないのっ!?!」

私は驚愕する。確かに妨害した、そのはずなのにイノケンティウスには何も変化がない。

「おらぁあぁ!!」

私が妨害できなかつたイノケンティウスに、上条さんは右手で殴

り掛かり、イノケンティウスは甲高い音と共に消え去る。

「へっ、対した事ねえな。次はてめえだ!!」

そして上条さんはステイルに向かう為また駆け出そうとする。

「ダメ！ まだあの炎の巨人は消えてないんだよ!!」

「えっ？ なっ」

「S A（行動を停止せよ） ダメ！ なんで止まらないの!？」

「くっ おらあ!!」

上条さんの背後に蘇ったイノケンティウスが現れ、私はまた妨害するがそれは通用しなかった。

上条さんは再びイノケンティウスを右手で掻き消し、そこから距離をとる。

「な、なんで……確かに消したはずなのに、どうやって」

「イノケンティウスはルーン えっと、ステイルは文字を刻んだ紙を辺りに配置してるんだけど、それを全部破壊しなきゃ、イノケンティウスは消えないの！ けどそんな事してる暇はないし、イノケンティウスは無視して直接ステイルを狙うしかないかも！」

「あのデカブツに邪魔されててそれどころじゃねえよ！」

「うん、だから私が妨害して隙を作ろうとしたんだよ！ でも何故

か通用しないかも」

上条さんは再度復活したイノケンティウスの相手に戻る。何度右手を振るっても復活するイノケンティウスに苦戦しながら、イノケンティウス自身の温度で彼はだんだん体力を消耗していく。

「なんで……」

私は何が悪かったのか考えてみるが、しかし答えは出てこない。成功した時と同じ感覚でやったはずなのにできなかった意味が理解できない。

私はステイルを見る。私が原因でなかったら彼に何かあるはずだ。

すると私の視線に気付いたステイルが自分の耳を微笑みながら指差した。

「あーっ!？」

「声は聞こえないがどうやら気付いたみたいだね。そう、君の強制詠唱は声が相手に届かないと乱す事はできない。僕はずっと君を狙ってきたんだからね。対策ぐらいちゃんとしてあるよ」

耳栓。単純にして最適な私封じだった。魔力が使えなければ、相手の魔術を利用するしかない。相手の魔術を利用するには何か五感を用いて、相手の考えに干渉しなければならぬ。

その最も簡単な手段が声。他の感覚に干渉する時のように時間も手間も掛からず、道具も必要ない。けれどこれは相手の耳に入らなければ意味がないという弱点があった。

「くっ、ちくしょう！」

上条さんはイノケンティウスに苦戦しながら叫んだ。インデックスのように応用力のないバカな私では戦う手段が見つからない。

「やっぱり、私じゃダメだったんだよ。せめて君だけでも」

「勝手に諦めてんじゃねえ。まだ俺は戦えるんだよ！ お前は俺がああの不良神父を倒すところを黙って見ていればいい！ だからさっさと逃げろ！」

上条さんはこんな状況でもまだ諦めていなかった。炎の巨人を退け、魔術師本人に向かおうとし、炎の巨人に妨害されを何度も繰り返しても、まだ全く諦めていなかった。

右手以外は魔術や超能力のような防御手段がないただのちよつとタフなだけの人間だ。あちこち火傷もしている。けれど、それでも彼はまだ身勝手に助けを求めに行こうとしていた私を、偶然襲われているのを見掛けただけの私を助けようと必死に頑張っているのだ。

こんなところで、こんな序盤で私が諦めていいはずがない。

目指すはハッピーエンドなんだから！

「君、嘗めないでよ！？ 私は守られているだけのお姫様じゃなくて、自分で自分を救い他の人も助ける騎士キヨウシの方がいいんだよ！」

「へっ、ならそんなところで立ち止まってんじゃねえよ。いいかげん始めようぜ、シスター！！！」

第五節 禁書目録は見つめる。(後書き)

強制詠唱についてはよくわかんないから独自設定です。ノタリコンは英文の頭文字で暗号文を作っています。本当は日本で『美味しいケーキが食べたいな O C T』みたいにしようと思ったのですが、原作に出てきた英文のヤツを出してしまったので諦めました。

とりあえず狂愛には超能力とかの科学や魔術とか空想や神話の知識は一切ありません。『ねぼし』並のとんでも設定が出るかもしれないので注意。

てゆうか当初は上条さんは完全ネタキャラのヘタレ鈍感野郎にする予定だったのが、何故か(狂愛的に)格好良くなってしまった。あと、ステイルも状況を変えるだけで全然噛ませじゃなくなってる。ビックリです。

後書きまで読んでるバカ(褒め言葉だよ?はあと)な皆様ありがとうございました。別に重要な事は全作品共通して書いてないです。

「ねえ、その炎の巨人の相手をしていなかったらあの魔術師、ステイルに勝てる？　ちなみに補足としてステイルは接近戦は得意じゃないんだよ！」

私は未だにイノケンティウスと戦っていて消耗し続けている上条当麻に問い掛ける。

まずはそれが前提だ。

ステイル・マグヌスにインデックスは傷付けられないが、インデックスではステイル・マグヌスを倒せない。この場では上条当麻という駒でしかステイル・マグヌスは倒せない。しかし上条当麻はイノケンティウスという強力な駒で封じられている。これが今の状況だ。

勝つ為にはイノケンティウスという強力な駒を封じ、ステイル・マグヌスに上条当麻をぶっつけなければいけない。

でも今の上条当麻は全快ではない。火傷だらけの汗塗れで呼吸も荒く、怪我をあまりしていないだけで満身創痍だ。

それが問題だ。

「おいおいおい、上条さんを馬鹿にしちゃってるんせうか？　こんなデカブツの攻撃屁でもねえよ！　作戦思い付いたんだろ？　なら、さっさと教えてくれ。そしたら俺があそこの余裕面の神父をぶっ飛ばしてやる！」

一応ステイルが耳栓を外さないか警戒しながら聞いていると、上条当麻は頼もしい返事を返してくれた。

これで前提条件はクリアされた。

あとは一番肝心な信頼関係。上条さんが私を信じてくれるかどうか。

「ねえ、かみじょうさん」

「とうまでいいよ、くっ」

「うん、とうま。私はインデックスだよ　って、そんな場合じゃないよ!」

「目次かよ、目次ですか、目次なんですか!？　どう考えても偽名じゃねえか!」

「だからそういうのはいいの!」

上条さん　ううん、当麻は必死にイノケンティウスを抑えながら、けれど何処か余裕を持ちながら私と会話を交わす。

本当は余裕なんてないはずなのに、私を心配させない為だろうか。優しい上条当麻の事だからきつとそうなんだろう。

「ねえ、とうま」

「なんだインデックス?」

「私の事が信じられる?　私の事が信用できる?　私の作戦を信頼できる?　私が嘘を言わないって信じてくれる?」

私は確実に信じてもらわないと困る、そう思いながらも尋ねた。

上条当麻という人間は信じていても誰かが危ないと感じたら助けに行ってしまう人間だ。相手が裏切られたと感じようとも自分が満足する為に人を助けるヒーローだ。

でもそれじゃあ、ダメだ。この作戦は上条当麻がインデックスを見捨てる選択をしないと成功しない。上条当麻自身に辛い選択をさせないと失敗してしまう。

だけど私に考えられる作戦はこれしかない。インデックスじゃなくて馬鹿な私にはこんな作戦しか考えられない。

上条当麻が戦う舞台を用意するには自分を犠牲にするしかないのだ。

「ああ、もちろんだ」

当麻は予想通りのお人良しな答えを返してきた。でもここからが、本当に信じてもらわなきゃいけない事を話してから頷いてもらわなければ意味がない。

「私のこの服、これは歩く教会って言って簡単に言えば魔術も物理攻撃も受け流して吸収するアイテムなど。まあ、超能力の亜種と違って。とりあえずこれは伝説にある聖ジョージのドラゴンの一撃と同等の威力の魔王の殺息ぐらいでしか傷付けられない、当麻が戦ってるイノケンティウスですら、これを着ている私に小さな火傷すら付ける事ができない。ここまで言えばわかるよね？」

「ええーつと……」

私の自分なりにわかりやすい説明を聞いても上条当麻は理解してくれなかった。理解してくれそうな様子がなかった。

私はそれに少し呆れてしまう。

「はあ、私がイノケンティウスを抑えるからステイルをぶん殴れつて事なんだよ。なんでか弱い女の子の私がこんな男気溢れた台詞を言わなきゃダメかな。言う前に理解してほしかったかも」

「ああ、悪い　つて、それは!？」

「とうま!！」

「お、おお　つて、おわ、やばっ」

私が大きな声で待ったを掛けると、上条当麻はビクツと動きを止め、イノケンティウスにやられそうになる。

なんとか回避したようだが私も一瞬焦ってしまった。

「とうま、作戦はこれしかない。そして私は平気なんだよ。言ったよね?」

私はここで一度区切る。

そして精一杯格好を付けながら言った。本当はすごく怖いけれど、その気持ちを隠しながら言葉を紡いだ。

「私は守られるお姫様ヒロインじゃなくて守る騎士ヒーローだつて」

精一杯笑った。ここで当麻に信頼して任せてもらわなければ意味がない。

本当は怖いけど頑張る。だから当麻も私にちゃんと任せて。

心の中で強く祈った。

「女の子に格好付けさせるなんて上条さんの立場が微妙な事になっちまうなあ」

私はその言葉を聞いて目を丸くする。

「お前に任せるって、お前を信頼するって言うてるんだよインデックス！ だからお前もあの不良神父を殴る役目は俺に任せて信頼しろ！」

何度目かわからないぐらい消し去ったイノケンティウスが再生するのを見ながら上条当麻は笑った。傷だらけ泥だらけ汗まみれの身体で元気に笑った。私をちゃんと信頼してくれた。

私はそれを嬉しく思う。

「行くぞ、インデックス！ こっからが本番だ！」

「うん、足手まといはイヤなんだよ？」

「ばかっ、こっちの台詞だ！」

私達は笑い合った。

作戦は伝わった。お互いに了承し合った。だからこれからは行動するだけ。

まずは当麻がイノケンティウスに圧されるフリをして、後ろ向きにステイルに近付いていく。

「くっ
」

いや、実際に圧されていた。行動は作戦通りだが体力が限界に近い当麻にはもうイノケンティウスを相手に戦う事も限界に近付いていた。

「インデックス、そろそろその能力者も終わりそうだよ？」

ステイルは笑う。自分に上条当麻を近付けさせないイノケンティウスを、自分の努力の結晶たる最高の魔術の勝利を疑わず余裕の笑みを浮かべている。

でも

「とっまー！」

「おっ！ー！」

その余裕もこれで終わりだ。

「な、なにっ!?!」

私がイノケンティウスの前に立ち塞がり両手を広げてガードした瞬間、当麻はステイル目掛けて走り出した。

ステイルには信じられないだろう。能力者ならば、魔術インテックスに関わりのない現代人ならば魔術の存在を信じない。たとえ私が教えたとしてもそれを簡単に、こんな短い期間の信頼関係で信用する事はできない。私のような幼女体型の少女が強力な防御能力を持っているとは考えられない。

普通なら信用するフリをして、見捨てて私を盾にして逃げるか、信用せず任せないままステイルを狙いながらイノケンティウスに阻まれ続けるのかの二択だ。

けれど上条当麻はどちらも選ばず、お互い信頼し合いながら戦う事を選んだ。助けるフリをして逃げられ、後ろからイノケンティウスにやられる事なんか全く考えずに、一瞬の隙を狙って、残った力を振り絞ってステイルまで全力で駆けてきた。

「ば、ばかな」

「てめえの物差しで俺を計ってんじゃねえよ魔術師!」

私は両手を大きく広げてイノケンティウスの進路を塞ぐ。熱さを感じない。恐怖は今まで生きてきた中で一番感じる。目と鼻の先で高温の炎の塊が揺らめいているのを見て今すぐ逃げ出したい衝動に駆られる。

けれど私は逃げない。信頼してくれた人の為、私を助けようとしてくれた人の為に精一杯努力するんだ。

私は当麻の方をちらりと見る。

「これで一対一だ魔術師!!」

「くっ　イノケンティウス!!」

ステイルは慌ててイノケンティウスを戻そうとするが私のせいで間に合わない。そして足掻いている間に上条当麻がステイルの目の前まで移動する。

「喰らえ魔術師！　これが俺の幻想殺し（イメージブレイカー）だ
!!」

「ごはっ　　がああああああ!!!!?」

当麻の右手がステイルの顔面に突き刺さった。元々身体も鍛えていない魔術師のステイルはそれを交わす事が出来ず、そのまま吹っ飛んでいく。

「余裕かましてるからそうなるんだよ！」

壁に激突して気を失ったステイルを見下しながら当麻が吠える。

イノケンティウスは主が気が失うと同時に消え去った。私はそれを見て緊張が緩みぺたんと座り込む。

「インデックス！」

そんな私の様子を見て当麻は私の心配をして飛ぶように駆け寄ってくる。

「大丈夫か!？」

「それはこっちの台詞なんだよ！　とうまはボロボロ、私は無傷、心配されなきゃいけないのは当麻だよ！　しかも原因は私なんだよ!？」

私は座り込みながら今にも噛み付きそうな勢いで当麻に怒鳴る。

この人は本当にお人良しだ。誰かの為に自分を犠牲にできる聖人君子のような人だ。けれどそう言っても彼は否定するだろう。だから言わない。

当麻は苦笑いしながら私を見る。

「俺がやりたいからやったんだ。インデックスは気にする必要はない。それより本当に大丈夫か!？」

「こういう言葉がすらすら言える優しさがああ無自覚ハーレムを形成できたのだろう。」

私は笑った。

「なんだよ。何笑ってんだよ？」

私の笑い声を聞いて当麻は納得できないような、理解できないよ

うな顔をする。

ばーか。

私は心の中で罵った。

「よし、行くぞインデックス。さっさと行かないとアイツが」

ピキュイン。

私を急かそうとした当麻が“右手”で私の肩に触れた瞬間、甲高い音と共に服がバラバラになっていく。

「あ、えっ、なっ」

「とうまのばかー！ 見るなー！！」

「ごめんなさーい！！！！」

私は必死に両手で身体を隠しながら真っ赤な顔で叫ぶ。半泣きになつた瞳で睨み付ける。

すると、上条当麻は手慣れたジャンピング土下座を披露した。

ああ、この人は間違いなく上条当麻だ。

第六節 禁書目録は考える。(後書き)

原作上条さんってどう考えてもフラグクラッシュなラッキースケベで好感度上がるですよ。超不思議。

ちなみにこの小説に出てくる女性キャラはラッキースケベなんてされたら著しく好感度が下がります。しかも自業自得を不幸などと言われたら激怒(照れ隠しではなく)します。

それでもフラグを順調に立てていくのが上条さんなんでしょうけどね。

てゆーか元々3000字程度でギャグ風に終わらせる予定だったステイル戦がなんか長くなっちゃったです。

第一節書いた後になんとか書いてみた予定表では

『禁書目録に憑依する

ステイルから逃げる 落ちる

何故か一方通行のベランダへ

一方通行は最初は原作通りの性格

勘違いした一方通行に殺されそうになって逃げる

ステイルに見つかる

そこで上条さん登場 そげぶ

歩く教会は壊させない』

上条さんそげぶしてないし、歩く教会壊れますよね。やっぱり予定なんて頭の中で立てるだけで充分だと再確認しました。

第七節 禁書目録は繕う。

「おい、クソムシ。さっさと買ってきた針と糸寄越すんだよ」

「……はい、どうぞお姫様」

「本来なら通報ものだよ？ かみじょうさんはとんでもない変態なんだよ」

「いや、それは知らなくて」

「はあ？」

「いえ、何でもありません」

あの後、強制野外露出プレイなんてマニアックな目に合わされた私は半泣きで当麻の着ていた学生服の半袖を奪い、裸に半袖のシャツという特殊な格好でバラバラになった歩く教会を集めた後、当麻の学生寮まで案内してもらい、それから当麻には針と糸を買いに行かせ、部屋でタオルを身体に巻き付けながらずっと待っていた。そして当麻が帰宅して今に到る。

私はこの身体の本来の持ち主ではない。外身は別人だ。つるぺたで幼児体型な身体は私の身体と真逆だが、それでも中身が私の状態で見られるともものすごく恥ずかしい。しかも生えてないとか涙目過ぎる。

人生で初めて異性に身体を見られた私はそれはそれは大いに暴れた。当麻から携帯を奪って通報してやろうかとも考えた。

しかし恩人だし、これから助けてもらわなきゃいけないし、と頭に過ぎった考えのせいで冷静になってしまった。

だから（暴力以外）何もせずに許す事にした。

「こつち見たら今度こそ全力で息の根を止めるんだよ」

「は、はい！」

助けてもらったのに失礼だとは思うが私は容赦しない。私の今の態度も悪いが、異能でできていると説明したのにうっかりそれを忘れて壊した当麻も悪い。善行は悪行を帳消しにはしないのだ。

私はバラバラになった歩く教会を縫い合わせながらふんつと鼻を鳴らす。

これで私のチートが一つ消えた。あとは魔力が使えないからほとんど無駄な魔術の知識だけだ。

ちなみに私はインデックスとは違って裁縫ができる。勉強は下の下、スポーツはあの胸のせいと馬鹿にされ、芸術の時間はある意味芸術と呆れられていた私だが、一人暮らし生活が長かったので家事全般は得意だ。

安全ピンで繋げるなんてパンクでちらつと隙間から見えそうな工口服を着なくて済みそうなので、家事全般をできるようにしていた自分を褒めてあげたい。

「よし、できた！ あ、でもまだ着てないからこつち見ちゃダメだ

よ?」

「はい!」

当麻に注意した後、私は巻き付けていたタオルを外して、縫い繕い終わった服を着る。

うん、全裸に修道服もどう考えても変態だ。めっちゃくちや神の教えに背いている背徳感がする。

とりあえずこの一件が終わったらスタイルと神裂にお金を借りて服や下着とか生活用品一式買わなきゃ。

上条が借りれる程お金を持っていない事は原作で知ってる。だから必要悪の教会ネセサリウスから私の養育費インデックスなり生活費なり貰えるように話さなければ。

もし上条さんと一緒に生活する事にならなくてもお金は必要だ。上条さんと暮らすなら尚更必要だ。

家事とかはするつもりだが、タダ飯喰らいの居候になんかなりたくない。どう考えても天罰が降りそうだ。

あ、生活用品といえば、インデックスにも生理はあるのかな。幼児体型的な意味と小説キャラクター的な意味でなさそうだ。

もしあるなら軽い方がいいなあ。私の身体は重かったから。

「もうこっち向いていいんだよー」

「お、おう」

私は修道服をひらひらと振りながら当麻に自慢げに見せる。

「どう？ 完璧でしょ？ インデックスさんは裁縫は得意なんだよ。世界上位一万に入るかも！」

「微妙だな、オイ！」

当麻の見事なツツコミに私は笑う。

さて、コミカルな時間は終わりだ。これからはシリアスにいかなければ。

「聞きたい事あるよね？」

「えっ」

「とうまは無理に話さなくてもいいって言うんだろうけど、とりあえず私としては聞いてほしい。とうまに強力してほしい事があるんだ……」

私は申し訳ない気持ちでいっぱいになりながら顔を伏せる。

私は自分の都合で当麻を巻き込もうとしている。しかも危険が伴う事に、一本間違えれば記憶が破壊され　　ううん、違う。死ぬ事だつて十二分に有り得る事に他人を巻き込もうとしている。

インデックスなら事情を話さない。『じゃあ、私と一緒に地獄の底までついて来てくれる？』なんて脅すような怖い事を言って、本

当は助けを求めているくせに誰にも頼らずに、迷惑を掛けずに善人らしい事をするだろう。

けど私は違う。インデックスではない。自分が消えてしまう事が、死んでしまう事が何よりも怖い。

だから私は彼に縋る。彼の右手を頼ってしまう。彼の性格に甘えてしまう。

本当に酷い女だ。どうしようもなく酷い、自己中心的で最低な女だ。

断ってくれてもいい。私は恨む事なんてしない。

それが当たり前なんだから、むしろ断られて当然なんだから。

けれど上条当麻は、このどうしようもなく優しい王子様は、私が頼った右手以外無力なこの少年は、何の躊躇いもなく、何の迷いも持たずに私に言ってくれた。

「話してくれよ。俺はこの学園都市では最弱の無能力者にカテゴライズされてる。でも俺の右手は、幻想殺し（イマジンプレイカー）はそれが異能であれば神様の奇跡だろうが、たぶん打ち消せる代物なんだ。そんな俺の右手で良ければ、こんな俺の頼りない力なら喜んで貸してやるよ」

「うつつ、ありが、とう……と、うま……」

当麻の力強い笑顔を見て、頼りがいのある言葉を聞いて私の視界が滲んでいく。

そして更にそれは大きくなって、遂には私の瞳から涙が零れ落ちていった。

こんなどうしようもない悪女の為に、出会ったばかりの私の為に、協力する必要なんてないのに彼は迷う事なく了承してくれた。

ずっと怖かった。目が覚めた瞬間からいろんな人に襲われ、自分が消える事に怯え続け、それでも報われると信じて、上条当麻なら救ってくれると信じて、彼を頼った。そして彼は了承してくれた。

これで私は救われる。

「お、おい、何も泣くことは」

「……ううん、本当にありがとう」

タオルで涙を拭いながらお礼を言う。少し鼻水まで出てきてしまったのは乙女的に内緒だ。

「お礼は問題が解決してからにしろよ、な？」

イケメン過ぎる。なんだこのガサツな王子様キャラは。乙女のハートわしづかみか！ 私は落ちないけども。

「うん！」

そんな罵倒を覚らせずに満面の笑みを見せる。

さあ、ここからは私を救うターンだ。

「あー、インデックスには完全記憶能力つてのがあって、それで読むだけで発狂しちゃう魔導書を10万3000冊記憶してる。で、脳の85パーセントがそれに使われている為1年ごとに記憶を消さなければ死ぬと教会で言われているが、それは科学的に考えて有り得なくて、教会がインデックスに反逆させないように付けた首輪の術式が原因で1年ごとに苦しんで、記憶を消さなければいけない。そしてその術式は調査の結果インデックスの口の奥にあって、それを俺に破壊してほしい。でも完全に破壊しなければ、防御術式『ハネのペン自動書記が発動して、インデックスは意識があやふやになり、術式を破壊しようとした俺にとんでもない魔術で襲い掛かる事になる。…
…こんな感じか？」

何度も幾度も何回も長々と説明した結果、当麻は漸く理解してくれた。

「うん、でも重要なのは首輪が私の喉の奥に術式が刻まれている事。それを不完全に破壊すると自動書記が発動する事。自動書記発動中は私は抗う事ができないから、幻想殺しでも完全に防ぎきれないような魔術を使ってしまう事。これだけ覚えてれば大丈夫だよ」

「だったらさっきの説明は何だったんだよ」

当麻はやる瀬なさそうに溜息を吐いた。私と同じように頭がよるしくないのにも関わらず、人の命が関わっているから頑張ってるって覚悟としていた。そんなところだろう。

「あ、あとコレも重要！」

「……ん？」

「さっきのステイルともう一人の神裂つて魔術師達の協力もないと自動書記はとうま一人では勝てないんだよ」

「はあ、アイツは敵だろ！？」

「……事情があるんだよ。でもインデックスを救えるって事になれば絶対に協力してくれるかも！」

私を助ける理由はないだろうが、インデックスを助けられるなら彼等は喜んで腕の二、三十本は差し出すだろう。特にステイルが。

「なら最初からそれを話せば良かったんじゃないの？」

「えっ」

当麻の言葉に私は固まる。

そつだ、科学的な根拠とか説明できる事はたくさんあるし、何よりインデックスの為なら彼等は動く。あの襲撃すらインデックスの為なのだから。

最初から説明して、幻想殺しの話をしていれば戦闘なんてなかったのでは？

「もしかして……インデックスって頭良さそうな印象だったけど、

本当はちょっとおバカさん？」

「とうまのバカーっ!!!!!!!!!!!!!!」

「うわーっ、ご、ごめん!!!!!!」

あの熱戦は何だったのだろう。

完全記憶能力なんてチートがあっても私は相変わらずバカなよう
だ。

第七節 禁書目録は繕う。(後書き)

一方その頃、作者が早く出したい愛しのサーシャちゃんはロシアでワシリーサに襲われていた。

クロイツェフって確か男性名ですよ。実は男の娘だったとかでも普通に愛せますけど。

てゆーかそれならわざわざ同性婚が認められている国に行かなくても日本で結婚できるッ!!!!!!!!!!!!!!

あとは二次元の壁を破れば……。ちょっとテレビに激突してきましたね。

P・S・大助様の言葉を参考に、文章を修正させてもらいました。

第八節 禁書目録は説得する。

それからの話。当麻の右手はフードには触れていなかったから、幻想殺しは歩く教会を全て破壊した訳ではないから彼等はその魔力を頼りに此処に来るだろう。だからそれから説得する、という事で話し合いを終わり、私達はずっと待っていた。

結果、当麻の住んでいた学生寮の一室は吹っ飛んだ。

場所は変わって近所のファミレス。認識阻害のルーンで、ステイルが魔術的な話をしても気にされないようにして、私達は事情を説明した。

厨二病扱いされたくないから助かったんだよ。厨二病な世界に住んでいるけど、病人は扱いはやめてほしい。

「つまり君が一年ごとに苦しむのは完全記憶能力のせいではなく、あの女狐の仕掛けた魔術のせいだ？」

「うん、口の奥に刻まれているみたいなんだよ！」

「……なるほど。しかし科学知識があまりないせいでこんな簡単な事に気付けなかったとは」

「おい、お前等！ 俺の部屋が大破した事や俺が二人掛かりでフル

ボッコにされた事についての謝罪はまだか、まだかよ、まだなんですかあ？　いくら上条さんの心が広くてもこれは流石に許せないのですが！」

火傷の後に加えて青痣まで増やした痛々しい姿で当麻は吠える。

彼は二人掛かりで襲撃してきたステイルと神裂が動きを止めるまで一人で必死に頑張ってくれた。そのおかげで対談の機会が得られた。感謝の言葉を何度言っても感謝しきれない。

私はついでに当麻の言葉を聞いて、部屋に襲撃を仕掛けてきたステイルと神裂ねーちんを止める為に「私の為に争わないで！」と言った事を思い出す。

全く関係ない事なのだが一度は言ってみたかった台詞が言えて私は満足だ。

「……そ、それについてはすみませんでした」

礼儀正しいサムライガール（見た目はただの年増痴女）は当麻の言葉が耳に入り脳に伝わると、すぐに眉を八の字にして額が机に引っつくぐらい深く頭を下げる。

「勘違いさせるような事をするお前が悪い。いきなり歩く教会が壊されたのを感じすればアレは当然の事だ」

「あんまり怒ると身体に悪いかも」

「うがああああ！　神裂以外まともに謝ってねえじゃねえか！！！」

しかしステイルはツンデレらしくフンツと鼻を鳴らしながら謝る

事はせず、私は神裂のようにきちんと謝罪するより当麻のリアクション目当てでわざと謝らなかつた。

そんな全く悪びれない私達（私とステイル）に当麻は怪我している事なんか嘘のように元気に叫ぶ。

うむ、良いリアクションだ。

しかし当麻は本当にめちゃくちゃタフだと思う。実際に経験してみても再確認した。

どう考えても人間の身体じゃないよね。原作3巻とか、御坂にやられた時点で私（インデックスな今でも）なら倒れるよ。アックア戦とかは絶対に隠れていたいと思う。

私がそんな外道な考えをしている間にも話は進んでいく。

「で、どうすんだ？ 俺としては今からでもいいからさっさと首輪だろつが何だろつが破壊してインデックスを解放してやりたいんだが」

「却下！ そんなボロボロの身体で自動書記相手に戦うなんて自殺行為なんだよ！！ 私の事はいいからやるなら万全の準備をしてからかもつ！！！」

自分の事を全く考えていない当麻の提案に私は怒りで頭が沸騰してしまった。

確かに私が頼んだ。そして当麻は引き受けてくれた。けれど私は当麻（の記憶）を犠牲にして生きていくつもりはない。当麻を私の

犠牲にする為に頼んだ訳ではないのだ。

怪我をすれば何度でも謝ろう。癒えるまで看病でも何でもやる。けれど自分（当麻）が消えれば、記憶という自己を形成しているものが失われれば、私は一体何をすればいいのだ。どうやって罪を償えばいいのだ。

そんな罪悪感に押し潰されて生きていく人生など私は望んでいない。救うならちゃんと心まで救ってほしいよ。

そんな私の考えを理解したのか、当麻はお得意の苦笑いで曖昧に笑う。

はあ、ダメだこの人は。

私はそんな曖昧な笑みに腹を立てながらも、当麻なら仕方ないかと微笑み返した。

そしてしばらく無言でお互い笑い合いながら見つめ合う。

「……おほんっ、何やら良い雰囲気を邪魔して悪いのですが、話を再開しましょう。ステイルの機嫌が悪くなっていますし」

別に邪魔しても怒らないよ。個人的には上条さんは支えてあげなきゃいけない、守られるヒロインよりも支えてくれる、一緒に隣で戦ってる御坂美琴みたいなヒーローが似合うと思うし。

それに当麻も私もそんな感情抱いてないだろうし。

そんな考えを神裂に返す事なく、私はステイルをちらりと視界に

入れる。

確かに不機嫌面だ。インデックスLOVEなステイル的には当麻と仲良しこよしな感じが気に食わなかったのかもしれない。

でもステイルにも当麻にもそういう感情は抱けないんだ。ごめんね。

告白される前にも心の中でバツサリ切断する。ステイルが好きなのはインデックス（中身もインデックス）だし、当麻はそんな感情すらないのに、私は心の中で笑いながら勝手に振った。

「なっ、僕は別につ」

「か、上条さんは」

「ああ、当麻さんとステイルさん的にはぼーいずならばを貫いて生きたい感じなのかしら」

「それはない」

「あと、なんでインデックスの口調が俺の母さんみたいなんだよ！」

慌てて否定しようとする二人の言葉を遮り、詩菜さん口調（やってみたら何故かできた。御使墮し関連のあーだこーだの世界の決まり的なんならでインデックス口調以外に使えるのかもしれない）でからかってみると、二人は仲良く声を合わせて否定した。

原作よりも仲良しな感じが あ、気のせいだ。足元でお互い足を踏み合いながら睨み合っているみたいだ。

しかしぼーいずならぶってる感じが。自分で言ってみたが、どちらが攻めでどちらが受けなのだろうか。

近所に住んでいた貴腐人で主腐の久保田さん曰く、上条×ステイル（前が攻め、後ろが受け）らしいが、実際に有り得ちゃったりなんかしちゃうのだろうか。そうなるらと幻想狩り？ 魔女殺し？ どんな名前になるんだろう。

私は当麻とステイルを交互に見る。

「な、なんだか急に寒気が……」

「俺なんか鳥肌が、なんか……」

すると、そんな私の邪まな考えを読み取ったのか、私の視線の意味を本能で感じ取ったのか、彼等はお互い体調不良を訴え始めた。

うん、こんな想像はやめておこう。私は腐敗への道は突き進みた
くはない。

「おほんっ！ また話が中断されてしまいましたね。……でももう
いいです。私が説明しますから」

そんな私達のやり取りに呆れた神裂が仕切り出す事にしたみたい
だ。

確かに脱線し過ぎた気がするし、真面目な神裂ならきちんとしっ
かりとまとめ、簡潔な説明をしてくれるはずだ。

「とりあえず決行は一週間後。場所は何処か広場みたいな場所に人払いをして、そこで行いましょう。それまでの間、上条当麻は治療に専念。私とステイルはインデックスに刻まれている魔術を調べます。もしかしたら安全に解除できるかもしれないので」

「そうだね、その方がいい」

「わかったよ」

「り、了解なんだよ！」

ステイルと当麻は神裂の丁寧で短くまとめた話に頷き、私もそれに少し遅れながら大きく返事をする。

予想通り、期待通りに神裂は話さなくてはならなかった事を一気に、全て話してくれた。

そしてもう用がないとばかりに立ち上がる。

でも私はそれに待ったをかけた。

「話さなきゃいけない事があるからちょっと残って。あ、できればとうまは先に帰ってて」

「おう！ まあ、帰るっても家がアレだけだな」

私は笑って当麻を見送った。

さて、シリアスタイムの始まりだ。

重苦しい表情の彼等を視界に捉えながら、私は優しく、残酷な嘘を語り始める。

第八節 禁書目録は説得する。(後書き)

実はインデックスさんの中の人には名前すら考えていません。どうせ出て来ないだろうけど。

第九節 禁書目録は偽る。

上条当麻が帰った後、しばらく三人共黙って誰かが話し出すのを重苦しい雰囲気を出しながら待っていた。

いや、話があると言い出したのは、彼等を待たせた私だ。二人は私が話し始めるのを待っているのだ。

私の記憶にはないが、彼等は1年間インデックスを敵として襲い続けていたはずだ。それについて罵倒されるのを待っているのだから。何故かその敵に協力を求めた事を伝えるのを待っているのだから。

けれど私が今から語り出す事はそうじゃない。嘘を嘘で塗り固め、彼等の為と自分を偽りながら、インデックスではないとバレル事を恐れる私が自分の為に付く嘘だ。残酷で私に優しい、彼等にも優しいかもしれない嘘を語り出すのだ。

それには決意が、少し勇気がある。

でも大丈夫。上条当麻もインデックスにずっと偽善使い（フォックスワード）として接し続けていたのだ。大丈夫、私にもきつとできる。

私は彼等を見つめ、そしてそのまま語り出した。

「とりあえずステイルとかおりが私を襲っていた理由はわかってるから何も言わない。責めるつもりもない。だから安心して」

「なっ、何を言っているんだい!？」

「どついう事ですかインデックス!? 私達にたとえどんな理由があるうとも貴方を苦しめ続けていたのは事実です! 罪です! それを何も言わずに」

「いいんだよ。かおり達は十分苦しみ続けたんだよ。だからもういいんだよ。全部許すんだよ」

二人は納得できないような顔をしているがこの話はこれで終わり。

私には怒る資格も、許してあげる資格もない。けれどここで私がインデックス許さなければ彼等はずっと自分を責め続ける。

諦めてしまった自分を、逃げてしまった自分を責め続ける。私はそんな悲しい事はイヤなんだ。

だから私は許すと言った。インデックスの代わりに、彼女しかできない役目を勝手に引き受けた。優しい彼女の真似事で彼等をごまかした。

この言葉を覚えていれば彼等の罪も軽くなるだろう。

たとえ自分を責め続けていても私の言葉に救われてくれるだろう。

だからこれでいいのだ。文句があるなら私じゃなくてインデックスに会えた時に言っしてほしい。

そして次はいよいよ本題へ。

利用する為の私(酷い女)らしい虚言で、彼等に私を助けさせる。

私が助かりたいが為に付く自己中心的な嘘を告げる。

私は更に勇気を振り絞って言葉を紡いだ。

「それとステイル達は疑問に思ってるよね？ 何故私が貴方達に協力を求めたのか、それを話そうと思う」

「……そうだね。かつては味方だったなんて言ったが、僕はその後にちゃんと敵と宣言し、それから実際に戦いもしたはずだ。一応昔の仲間だから頼ったのかもしれない、なんて事で納得しながらその提案に頷いたけど、君の目を見る限りそうではないのだろうか？」

ステイルは自嘲気味に、自分を責めるかのうな口調で私に問い返す。

そして神裂も同意するかのようにそれに無言で頷いた。

さあ、一世代の私の大嘘。お願いだから騙せますように。

「あのね、この服……歩く教会が当麻の手で壊れた時に手紙が出てきたんだ。私が私に宛てた手紙。昔のインデックスが次のインデックスの為に宛てた手紙。それにステイルやかおりの事も書いてあったんだよ」

私の突拍子もない発言に対し、ステイル達は驚愕する。有り得ない事だと嘘を疑う。

でも私は知識、インデックスではなく私自身が持っている知識でその疑いを消し去る。

「覚えてるかな？ 3人で写真を撮ろうってかおりが言ったら私が『写真に写ると寿命が縮まる』って大パニックになったとか書いてあったんだけど、私はそこまで世間知らずじゃないかも！ 昔の私は本当にバカなんだよ」

目を見開く少年少女（年齢的には）。私はその反応を見て上手くいつてる事に気が付いた。

そして更に続ける。

「ステイルは煙草まだ吸ってるよね？ 何度注意しても止めないって怒ってたんだよ？ それにかおりと一緒に風呂に入ると惨めな気持ちになるとかなんとか」

「イン、デックス……」

「……本当、なのですな」

当時を思い出しているのか、涙を堪えながら、けれど必死に笑顔を作りながら彼等は私を愛おしそうに見つめる。

そんな彼等を見ると私は心に、心臓にハリネズミでも入り込んだのかと疑う程の痛みを感じる。罪悪感を感じてしまう。

痛い、痛い、痛い。けれど当麻ではない上条当麻は、こんな行為を私ではないインデックスにずっと続けていたのだ。毎日顔を合わせながら笑顔の仮面を被り続けていたのだ。

私がこの程度で音をあげる訳にはいかない。弱音を吐いていいはずがない。

一度した決意を曲げたくなんかない。

痛みを堪えながら、上条当麻のように笑顔の仮面を張り付けながら、ステイルと神裂に話を続ける。

「私はね、手紙で知っただけで覚えていない。けどね、記憶には残ってない、頭の中からは失われている。それでも私にはまだ大切に残っている気がするんだよ」

「いいんだよ、インデックス。忘れてるのが当たり前なんだ。君が気にする事じゃない」

「ええ、そうです。それに頭の中から失われているのに一体何処に残っているのですか？」

私達の事は気遣わなくていい。優しい彼等は逆に私の事を気遣いながら無理をするなど言ってくる。

違う。これは嘘。無理なんかしていない。貴方達を騙しているだけなんだ。ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい。

そんな心の叫びを口から出さないようにしながら私は笑った。

「心に、なんだよ。私の心に、私の中に想いは残っているんだよ」

今までで一番痛い、一番鋭い痛みが胸の中で走り回る。堪えきれなかった涙が頬を伝っていく。

そんな私を神裂が抱きしめ、ステイルが頭を撫でてくれた。

嘘つきの私には相応しくない温かさが、優しさが伝わってくる。

私はそんな資格なんてないのにその甘い誘惑から逃れられはしなかった。

そしてそのままの状態で顔をあげながら二人に問い掛ける。

「私は貴方達の知るインデックスではない。それでも私を助けてくれますか？」

彼等はすぐに頷いてくれた。当然のように自然に頷いてくれた。

「私の魔法名はSalver000（救われぬ者に救いの手）です。断る理由なんてありません」

「ようやく君を救えるチャンスが来たのにその権利を放棄するなんて考えられないね」

二人の言葉に共鳴して鋭さを増す罪悪感を押し殺しながら私は笑った。

私が今言ってしまった『貴方達の知るインデックスではない』というの、全くの別人という意味だ。私はインデックスではない。

でも何故だろう。彼等に優しくされると耐え切れなくなるこの喜びは。普通に生きてきたはずの私が救いの瞬間をこんなにも喜んでしまうのは何故なんだろう。

もしかしたら私の心の中に、身体の中に、インデックスが残っているのかもしれない。そしてそのインデックスが喜んでくれているのかもしれない。

戯言だ。インデックスは私が気付かない内に無意識に無自覚に殺したようなものだ。だからそんな事は有り得ない。

けれど私の中の感情は私だけでは説明が付かないほど嬉しさに溢れていた。

「……………ありがとう」

視界がぼやけてステイル達はよく見えない。

けれど彼等は私に向かって優しく微笑んでくれているのがわかった。

ごめんなさい。私は自分が救われても貴方達に真実を告げる事はありません。生涯嘘を貫き通すつもりです。

本当にごめんなさい。それと優しくしてくれてありがとう。

第九節 禁書目録は偽る。(後書き)

「お気に入り登録、お気に入りユーザー登録、評価、感想も嬉しいけど、そんなものよりさっさとご飯を寄越すんだよ！ インデックス(完全記憶能力)になってからすっごくお腹が空くんだよ！」

まさにインデックス!!

第十節 禁書目録は感謝する。

煙草も吸う、酒も飲む、そんな合法ロリを現実で見た事があるだろうか。私は今現実で見てしまった。現在進行形で見てしまっている。学園都市の都市伝説である不老不死の研究成果と噂されている子供（に見える）先生を見て、実際に見る事で驚愕していた。

「ふむふむ、このなんだか顔色が悪いシスターちゃんは上条ちゃんの何ですか？」

「え、えつと……」

会話を聞くだけだと浮気がバレた時の修羅場のようにしか聞かないが、問題児大好き月詠小萌先生は上条当麻の為に聞いているのだ。病院帰りのボロボロの姿で謎のシスターを連れてきて、何か巻き込まれているのではと心配しているのだ。

それと顔色については触れないで欲しい。ステイルと神裂に嘘を付いた事を、嘘を付いている事をまだ引きずっているだけだ。その内回復するはず。

「こいつは俺のしん」

「私はインデックス。旅をしながら迷える子羊さんを救っているシスターさんなんだよ。それで悪い人に襲われているところをとうまに助けられて、その後行くところがない私にじゃあウチに来ればいいって言ってもらってお世話になってたかも。ね、とうま？」

「あいたたたた、あ？ あっ、ああ！ そうです、そうなんで

す、そうなんですよお！ それでその悪いヤツに俺ん家がぶっ壊されて、直るまでの間はインデックスだけでも小萌先生ん家でお世話してやってくれないかなあって！」

どうせ親戚とかどう考えても嘘だとバレる事を言おうとした当麻の言葉を遮り、私が代わりに説明する。

嘘を言うならどこどこに真実を交せて、バレない嘘の秘訣だそうさ。

まあ、彼女にはバレバレだろうけれどこれなら深くは聞いてこないだろう。当麻の脇腹を抓り、当麻自身からも説明させたから大丈夫なはず。

「つまり上条ちゃん達は狙われているから匿え、アンチスキルに連絡をしていない事を考えると更に事情は深く聞くな、そう言いたいのですね？」

「あ、はいそうです！」

「むむむ、私のお家が壊れるのは構わないと？ 上条ちゃんが不良になっただー、ですよ。よよよ……」

「いや、それはもう大丈夫ってゆうかなんていうか……、とにかく小萌先生の迷惑になる事にはなりません、しません！」

あばばば。確かにそう受け取ってしまうよね。そこまで考えが及ばなかった。家が壊れたから泊める、お前ん家も狙われるかもしれないが我慢しろ、そんな風にしか聞こえないよね。

当麻が慌てて否定したが、小萌は少し疑いの色の瞳で私達を見ている。

「まあ、それについてはいいです。先生は困っている生徒ちゃん達を助けるのが生きがいですから」

「あ、ありがとうございます」

「ありがとうなんだよ！」

「けれど！」

小萌の言葉を聞いて喜んで、そしてお礼を言ったのだが、彼女はまだ何かあるのか私達に言葉を続ける。

「私は先生です。生徒が危ない目に遭うのを見過ごす訳にはいきませんよ。それにその青白い顔のシスターちゃんは学園都市の人間ではないようですが、ちゃんとIDを持っているのですか？」

「あつ……」

小萌の言葉は反論しようがない正論だった。私は言葉を詰まらせ何も言えなくなる。

当麻の方をちらりと見ると、彼も同じく何も言えないようで、苦笑でしか返事が返って来なかった。

「先生はこれから夕御飯の買い出しに行かなければなりません。ですが帰ったらちゃんと説明してもらいますよ？」

当麻と顔を合わせ、お互いに苦い、苦しい顔をする。

こうなったらステイル達を頼ってホテルでも借りるしかないから無理だったんだ。 ID

仕方ない当麻とはここで別れて野宿生活をするしかないか。スキルアウトとかいて治安悪いから怖いけど、きつとなんとかなるはず。

「何を二人して悩んでるのか知らないですが、まだ先生のお話は終わっていないですよ?。」

小萌先生が怖いというより愛らしいという言葉がピッタリな感じで怒り出す。ぶんすかぴー、と小動物に威嚇されている気分だ。

あれ? こんな感じの事が、イベントが何かあったような……。あやふやな記憶だからインデックスではなく私が知っている事のようだ、何だっただろうか。

「こほんっ、でも先生はお買い物に夢中になって忘れてしまつかもしません」

思い出した!

「だからちゃんと自分から話してくださいなのですよ?。」

「こ、小萌先生……。」

「では、いつてきまーすなのです」

原作、上条当麻が同じように小萌を頼った時、彼女は同じように

遠回しに聞かない事になると、言わなくていいとチャンスを与えてくれた。

この世界の小萌も同じだった。何か事情があるのはわかっていながら、大人として関わらなければいけないのに、関わりたいのに、無理に聞かないという選択を選んでくれた。

私達はそんな小萌に感謝しながら彼女が出ていったドアに対して同じように一緒に頭を下げた。

話せば彼女は学園都市の力を、教師として大人として使うだろう。

けれどそれじゃあダメなのだ。彼女にできる事は残念ながら何もないのだ。

「こもえっていい人だね」

「俺みたいな問題児の面倒を見てくれる優しい先生だからな」

あんな先生は私の学校にはいなかった。面白い先生なら世界史の山口先生とか授業中に「俺は自由になる！」と窓から飛び降りた（一階の）先生がいたけど、小萌先生のように生徒が生きがいな先生など存在しなかった。

「とうまが羨ましいかも」

「補習は勘弁してほしいけどな」

「それはとうまが悪いんだよ」

「上条さんは頭がよろしくくないんですよ　って、インデックス！
お前本当に大丈夫か！？　めちゃくちゃ顔色が悪いぞ！？　お腹
が痛いのか？　もしかして女の子の日か！？」

デリカシーのなさすぎる当麻の言葉に私は呆れる。心配してくれ
るのは嬉しいがどう考えても普通なら噛み付き制裁が行われるよう
な言葉を聞いて眉間に皺が寄る。

「とつま……」

「どうしたインデックス？　えっとこういう時は酸っぱいものとか
か！？」

「それは妊婦さん」

「じゃあ、ネギを首に巻いて　」

「効果があるのかは知らないけど、それは風邪の時。てゆうか私せ
い　こほんっ、そういうのじゃないよ。ただ気分が悪いだけだか
ら」

顔を紅葉のように染めながらボソボソと否定する。

心配しなくても今日は嘘ばかり付いて心が痛むだけだ。身体は何
も問題はない。

「そ、そっか……そうだよな。インデックスにはまだ早いもんな！」

この人はいちいちこういう発言をしなければ会話もままならない
程に愚かしい人間なのだろうか。紳士的な振る舞いというのを知ら

ないのだろうか。

恥ずかしいのをごまかす為なのかもしれないが苛立ちを感じてしまつのは仕方ない。

インデックスに向けた言葉なのに私が苛立ってしまったのは私がインデックスの中の人になっているからだろう。

そしてそれならインデックスの為にもここは心を鬼にして怒らなければならぬ。ああ、そうだ。これはインデックスの為なのだ。

だからこれは仕方ない。今からの私の行動は仕方ない。全て仕方がない事なのだ。決して私の堪忍袋の緒が切れたからなどではない。

てゆうかみんな当麻が悪い！

「とうま？」

「ん？ なんだインデックス？ 先生が帰って来る前に部屋でも片付けておくか？ どう見ても散らかってるし」

「屋上」

「えっ」

当麻の息子が死の淵をさ迷いました。

第十節 禁書目録は感謝する。(後書き)

好きな禁書SSならたくさんありますが、好きな禁書の二次創作小説は一作だけです。それ以外はあまり読んだ事がありません。禁書メインではなく他作品メインの禁書クロスならありますが。

そんな勉強不足な狂愛です。

勝手に紹介はダメだと思うので、理〇郷の憑依ものだけに。あれはすつごくオススメできます。

……ああ、そんな話をしたら読みたくなってきてしまったです。

第十一節 禁書目録は救われる。

昼間なのに誰もいない不思議な空間。この広場には今、ステイルの魔術で人が無意識に近付かないようにされている。

そこにいるのは四人。息を荒くしながら地面に座る私、その私の肩を掴みながら右手を握り締める上条当麻、煙草を啜えながら私を見守るステイル・マグヌス、七天七刀と呼ばれる長い刀を構える神裂火織。

彼等はインデックスを救う為、今日まで万全の準備をし、ステイルの、神裂の、インデックスの歴代パートナーの悲願が今実現する。

「準備はいいか、魔術師!？」

「それはこちらの台詞です、能力者」

「足手まといになるのは勘弁してほしいね。これは失敗が許されないんだから」

「ハッ、上等だ。イギリス清教の最大主教さんアークヒンヨットとやらよお!? てめえが魔術の首輪なんかでインデックスをずっと飼って殺しにできると思ってるなら 俺が、俺達がそんなふざけた幻想をぶち殺す!!!」

決行の日。私は痛みに、苦しみに耐えながら朦朧とする意識の中、彼等の頼もしい言葉を聞いた。

それから当麻は私の口の中に右手を突っ込み首輪を破壊した。

冷たい機械のような感覚になっていくのに震えながら、私は彼等が助けてくれるのを待った。

そして今、目が覚めた。私は彼等によって救われたようだ。自分の無事を確認し確信した時、私は小萌に抱き突きながら、彼女の腕の中で号泣した。

ヨハネのペン

自動書記が発動した時の記憶は、完全記憶能力があるのにも拘わらず、何故かあやふやだったので不安だった。そしてその不安が解放され、私の心のダムが一気に決壊したのだ。

それからある程度落ち着いた後、当麻達がない事に気付くと、私は小萌に掴み掛かった。

まさか原作通りに記憶を、もしくはそれ以上の怪我を負ったのは、最悪の可能性を考えると死んだのではないかと、私は小萌を揺らしつつ叫びながら尋ねた。

しかし

「いやあ、帰ってきたらインデックスが泣きながら叫んでるから何事かと思ったよ。本当にインデックスは泣き虫だよなあ」

「ふんっ、だから僕はインデックスが起きるまで待とうと言ったんだ。それなのに貴様がパーティーをするから荷物持ちに着いて来い

と
」

「おや、ステイル。スーパーで『インデックスにこんな安物を食わせるつもりか!』と上条当麻に掴み掛かって帰るのが遅くなったのに、その責任から逃れるつもりですか?」

「なっ、神裂っ!?!」

「そうそう。てゆうかあんな高い物ばかり買ってたら上条さんの財布どころか預金まで無くなってしまつのですことよ?」

「上条当麻!?!」

彼等は無事だった。

万全な状態で挑んだはずなのに、ところどころに包帯を巻いている痛々しい姿だったけれど、彼等は全員その怪我だけで、上条当麻の記憶を犠牲にする事にはならず、癒える傷だけで済ませ、私に不安を吹き飛ばす程の元気な姿を見せてくれた。

それから今、彼等は私の為にパーティーを開いてくれている。小萌の小さくてボロいアパートの一室で、私が救われた記念のお祝いをやってくれている。

「上条当麻! その肉は僕のだぞ!」

「ハッ、お前のならちゃんと言前でも書いておくんだっとな」

「心配しなくてもまだまだまだお肉はたくさんあるのですよ!。先生が買ってきた豪華絢爛焼肉セットと上条ちゃん達が買ってきた食材達

は5人じゃ食べきれないほどたくさんありますから」

「あらあら、当麻さん的にはステイルさんが焼いたお肉が欲しくて欲しくて堪らなかつた感じなのかしら？　いつの間にか仲良くなつたのねえ」

「それはない！！」

「てゆうかだからインデックスはなんで俺の母さんの真似をするんだよ！？」

会話の中に当麻の記憶の有無を確認できるような事を交ぜ、そしてそれによって記憶も守られた事を確認できると私は完全に安心した。

帰ってきてから真つ先に確認はしたが、当麻が私のように欺いている可能性もあるので、あの時にした簡単な受け答えではまだ満足できていなかったから、気を抜いている今尋ねてみたのだが、彼は完全に記憶があるようだ。

良かった。本当に良かった。

「ほら、インデックス。お肉が焼けましたよ」

そして安心した私は、神裂　　ううん、火織が次々とお皿に入れてくれるお肉を胃の中にブラックホールでもあるのかの如く、バクバクと勢いよく食べていく。

幸せだ。今この瞬間、私は世界一幸福だと断言できる。

仲良く喧嘩する当麻とステイル、私に過保護な火織、そんな過保護な火織に甘える私、みんなを年長者の視線で見守ってくれる小萌、私は知らないがこれが家族というものなんだろう。

私はまた瞳が涙で滲んでいくのを感じて、ゴシゴシと瞼を手で拭く。

インデックスになってから何度泣いているのだろう。私はこんなに泣き虫だったのだろうか。

赤くなつた瞼を気にされないように私は元気に叫ぶ。

「かおり！ もっとジャンジャンお肉持ってくるかもっ！！」

「シスターちゃん？ お野菜もちゃんと食べなきゃダメですよ？ 神裂さんもシスターちゃんを甘やかし過ぎたらだめなのですよ」

「い、いえ、私はそんな……」

「遅いんだよ！！！！」

「うわ、それ俺の食べようとしてた肉！！」

「ふつ、不様だな上条当麻。僕みたいにちゃんと皿に移してからあー！？ ちょ、インデックス？ 人の皿から盗るのは」

「関係ないんだよっ！ お肉は全部私のものなんだよ！！」

「シスターちゃん！ 行儀が悪いのですよ！！？」

楽しい楽しい、幸せな、騒がしいけれど平和な時間。

次の戦いの準備期間でしかないこの時間を、この記憶を、私はずっと大切に守り続けていきたい。他の人にもこんな幸せを分け与えて　いや、違う。自分で幸せを掴めるように手助けしてあげたい。

私の目標は変わらない。目指すはハッピーエンド。私にとってもみんなにとっても幸福に溢れた夢の世界。

理想は高く険しい。けれど私は諦めたりはしない。

私は救われた。次は他の人の番だ。

「そういえば上条当麻。君はインデックスにちゃんと伝えただろうね？」

パーティーは終わり、私と当麻はホテルに帰るスタイルと火織の見送りの為に小萌のアパートから出てきていた。

そして別れの言葉を交わした後、スタイルが突然言い出した言葉に私は小首を傾げる。

何なんだろう。当麻が私の新しい首輪の役目になるとかそういう話だろうか。

「はぁ？　アレは魔術的な事なんだからお前から言った方がいい

「
って
」

「つまりまだ伝えていないのですね？」

私の問題なのに私は話に着いていけず、おいてきぼりにされる。

なんだろうこの疎外感。

私は唇を尖らせながら三人を睨む。

しかし彼等は私の不機嫌面を見てみないフリして、三人だけで内緒話を始めた。

「あー、もう、わかったよ！俺が言えはいんだろ！？」

そしてしばらくすると、突然当麻が叫び出した。それから私に視線を合わせ、予想外の言葉を告げる。

「ごめん。自動書記ヨハネのペンの一部が壊れたんだってさ。あはは……」

あ、あははじゃ済まないよっ!？

夜の闇に紛れて学園都市を見つめる影が一つ。特徴的な見た目の彼の事はこの暗い真夜中でも、それを知る者ならハッキリと誰だかわかるだろう。

第十一節 禁書目録は救われる。(後書き)

原作一巻の内容終了。昔から書いているバラバラに11/6(日)0:41現在で既にお気に入り登録2件差まで迫っています。この文章を読者様が読んでいる頃にはたぶん追い越しているでしょう。

自分の作品に負けるってなんだか言葉にできない気分ですよ。

とりあえず第一章はこれで終わり。次回からは第二章の始まり始まりです。

嘘つきで泣き虫で自虐しまくる、そして特技は何故か金的のインデックスさん。何故こんな主人公に育ってしまったのだろうか。

ヘタレンを騙し討ちして金的をくらわせる姿しかイメージできない。

第一節 禁書目録は歩く。

原作通り上条当麻と暮らす事になった私は、原作よりも豊かな暮らしを送らせてもらっていた。

火織に洋服や下着、生活用品を買ってもらい、ステイルにネセサリウスから給料という名の私の養育費（食費）を出すようにしてもらい、それを財布を落としそうな当麻ではなく私が管理し、原作のように金欠、家計が火の車という状況は避けられている。

そして家事全般は私が引き受け、ベッドは当麻に譲って、私は床に敷いた布団で寝ている。居候らしく振る舞っている。

もちろん当麻は最初は譲らなかった。女の子にベッドを譲るのは当たり前とか、俺は風呂場で寝るとかそういう部分だけでも紳士的に振る舞おうとした。

けれど私はそれを許さなかった。当然だ。私はそこまで図々しくない。だから「私は布団がいいかも！そして当麻がベッドで寝ないなら当麻の部屋を一日でゴミ屋敷に変えてやるんだよ！」と脅して、なんとか上条当麻の意志をへし折った。

ちなみに自動書記の話だが、詳しい事はわからない。当麻の右手で完全破壊ではなく、一部破壊で納まったのは不思議だが、何故なのかすらわからない。発動条件が厳しいし、どんな発動をするのかもわからないので、確かめる為に、試す為に発動させるなんてできないまま、今日まで異常なしで過ごしている。

そんなこんなで八月八日、記憶を失っていない上条当麻は、自分

の漫画だらけの本棚を見ても何の危機感を感じる事なく、普通にのんびりしていた。

しかし私としては家でのんびりするのにも退屈で、そんな上条当麻に「冷房が効いたお店でアイスを食べたいかも！ あ、もちろん奢るんだよ」と言って、彼を外に連れ出していた。

ちなみに奢る発言を聞いた瞬間、泣きながらありがたやくと拝む宗教が違う当麻を見て、貧乏な男はやっぱりダメかも、なんて感想を抱いた。

まあ、そんな感じで私はヒモ当麻を引き連れて街を歩いていた。青い髪の変態に出会ってしまった。

「なんやかみちゃん、また女の子にフラグ立ててる最中？ たまにはおこぼれに与りたいわぁ」

身長180センチオーバーで、髪を青く染めていて、ピアスを付けている怪しい人物。本名不明の青髪ピアスが私と当麻の前に現れた。

「はぁ？ 上条さんがいつ女の子にフラグ立てましたかぁ？ バカな事抜かしてんじゃないやねえよ、青髪ピアス」

「……うわ、ここまで鈍感やと殴り殺したくなるわ」

「ちなみに私にはとうまフラグは立ってないし、これから立つ予定もないんだよ」

いきなり仲良さ気に話し出した二人に置いていかれないように、

私は一瞬出来た話の間で言葉を紡ぐ。

すると青髪ピアスは驚いた顔で私の顔を観察するようにじろじろと見てきた。

「対カミジヨ―属性完全ガードな娘が他にもいたなんて驚きやわ。それにお嬢ちゃん日本語上手いなあ。てゆーかお嬢ちゃん、カミヤんとどんな関係？」

「日本語以外にもいろいろ話せるんだよ！ えっと、とうまとの関係は……お嬢様と執事みたいなの？」

ネセサリウス（雇い主）の大切な存在（お嬢様）と、その首輪（守護者）？

「はあ！？ カミヤんいつの間に執事なんかになったん！？」

「なってねえよ！ こいつはただの居候だ！」

問い詰めようと腕を掴んでくる青髪ピアスを振り払いながら叫ぶ当麻。ごめん、上手い事説明できませんでした。

「ただの……？ ただの居候！？ 女の子の居候に対して、ただの居候とかカミヤん何言ってるのや！？ 女の子の居候がいるとか全国の負け組が羨むステータスやんか！ カミヤんってアホなん！？」

「うるせえ！ ただのはただのなんだよ！ お前もさっき聞いただろ！？ ラブコメ要素はないって相手側が断言してるのにだろ！」

「ああ、……すまんカミヤん。興奮して忘れとったわ。けどムカッ

くから一発殴らせてくれん？」

「むしろお前を一発」

「Stop talking!」

周りが見えなくなつて騒いでいた二人は私が叫ぶと何事だ？と私の方を見る。けれどその前に周りを見てほしい。

だつて。

「みんな注目してて恥ずかしいから勘弁してほしいかも」

異性と同居とかの話ですっごい注目を浴びているから。

「おい、青髪ピアス。こういうのお前得意だろ？ お前が行けよ」

「冗談はやめてーやカミヤん。ボクが得意なのは二次元の話やで？
こういうの（三次元）はむしろカミヤんの得意分野やんか」

「じゃあ、インデックス！ お前が行つてくれ。迷える子羊の相手とか得意だろ？ シスターさん」

「流石に迷い過ぎてて修行中の身の私には荷が重いかも。犬のおまわりさんですら困りすぎて匙を投げるレベルなんだよ」

「いや、あのおまわりさんはただ困って鳴いとるだけで最初から頼りにならへんで?」

何故こんなに揉めているかというのは簡単な話だ。 巫女 巫女
さんがいた。

アイスクリーム屋さんが休業中なのを見て、そういえば今日は原作の日だったと思い出し、それからファーストフード店でシェイクを買った後、空いている席を探していたら、一人だけしか座っていない四人掛けのテーブルを発見した。

普通ならラッキーだ。けれどそこまで神様は当麻に優しいはずがない。

明らかに異質な空気を放つ巫女装束の女性がテーブルで居眠りをしていたのだ。名前も性格も原作で知っている。空気キャラ姫神秋沙、またの名を。

私が彼女の前に、当麻が私の隣、青ピが彼女の隣に、とりあえず「相席よろしいですか」すら聞かないマナー違反で座ったのだがここからが問題。誰が声をかける? 私達は今それで揉めている。

ちなみに私は彼女が怪しい人じゃないというのはわかっているから、当麻達が彼女に話し掛けられない理由と同じではない。

自称魔法使いさんと愉快にお話するのは面倒臭い。面倒な事は当麻に押し付けたい。私はイチゴのシェイクを飲んでまったりとしていたい。そんな理由です。

姫神と話す調子狂いそうだし。

あ、ちなみにシェイクはイチゴのやつ一つだけ。お腹壊しそうだからね。

「よし、ならじゃんけんで決めようや！」

「却下！ 俺が負けるのが最初から決まってるじゃねえか！」

「やれやれ。とうまっつては男らしくないかも」

「な、なんとでも言え！」

私が冷めた視線を向けながら鼻で笑うと、当麻は一瞬悔しそうな顔をする。しかしそう簡単に乗せられる程、バカではなかったらしく私の挑発には乗ってこなかった。

でもじゃんけんにはやりたくない人間を強制参加させる切り札がある。

私が意味ありげに青ピに視線を向けると、彼は意図に気付いたらしく、ニヤツつと笑いながら大きく頷いた。

「「出さなきゃ負けよ！ じゃんけんポン！」」

「なっ、うがああああああ！！！！！！？」

私と青ピはパー。少し後出し気味で出された当麻の手の形はグー。今日も上条当麻の不幸は絶好調なようだ。

「お、お前ら卑怯だぞ！？」

「勝ったもんが正義やでカミヤん？」

「負け犬の遠吠えにしか聞こえないんだよとうま？」

「……ふ、不幸だ」

多数決万歳。民主主義万歳。数で負けている為、抵抗は無駄だと理解した当麻は、諦めて深く深く溜息を吐いた。

そして決意の炎を瞳の中で燃やしながら、勇気を振り絞って、意を決して目の前の謎の人物、正体不明の巫女さん（当麻達の中では）に声を掛ける。

「あー、もしもーし？ 大丈夫ですかー？」

気分は地雷を警戒しながら草原を歩く地雷処理班。おどおどびくびくとしながら、巫女さんの肩を叩く。

すると、ピクンと姫神の肩が動いた。

「く、」

私はこの言葉の先を知っているので、特に何も思わない。

けれど当麻は随分警戒しているようで、ごくり、と喉を鳴らして、姫神が言葉を言い切るのを待つ。

「 食い倒れた」

予想通り姫神秋沙は、大阪人みたいな事を言い出した。

第一節 禁書目録は歩く。(後書き)

さん登場。たぶんすぐ消える。

第二節 禁書目録は貸し付ける。

「……、食い倒れた」

飲食店で偶然相席になった巫女装束の女性が机に倒れ込みながらこんな事を言う状況は幸福か不幸で言えば不幸だろう。日常か非日常なら非日常だろう。けれど面白いか面白くないかなら面白い。

まあ、私はこの状況を知っているので面白さは半減なのだけどね。

「……」

「……」

私と青ピが当麻を見ると、彼は新手のスタンド攻撃をくらったような顔をしていた。

まあ、こんな俗っぽい場所に巫女がいて、みよんな言葉を吐き捨てれば理解不能に陥る気持ちもわかる。

私は知り合いの川上さん（職業お坊さん）がカラオケでスリッパノットの曲歌ってた姿見た事あるから平気だけど。

「……な、何だよ？」

「……ほらカミちゃん。せつかく返事してくれたんやからお話したらええやん。まさか巫女さんをこのまま放置するつもりやないやろなあ？」

「……私は不甲斐ないんだよ。修行不足な上に人見知りな私には無理かも。だからとうまが頑張ってる！」

「なっ、このまま上条さんに押し付ける気でせうか!? てゆうかインデックスさん? 貴女、初対面の相手だろうと普通に話せてましたよね!? それにこういうのはむしろお前の得意分野だろ!」

そんな分野を研究した覚えはないし、インデックスの知識にも存在しない。

だいたいインデックスの知識がなければ日常会話が誤字脱字まみれだった私に期待するのはやめてほしい。

「なら、もう一回ジャンケンいつとく?」

「公平にそうするかも!」

「だからそれは不公平」

「出さなきゃ負けよ、ジャンケンポン!」

グー、グー、チヨキでまたしても当麻の一人負け。流石『不幸』に愛されている『不運』な上条当麻だ。

「あー、食い倒れたって何ざましょ?」

そのままの意味だと思う。なんという当たり障りのない言葉。

「一個58円のハンバーガー。お徳用の無料券がたくさんあったから」

「うん」

「とりあえず30個ほど頼んでみたり」

「お徳過ぎだ馬鹿」

突っ伏したまま話していた姫神秋沙は当麻の『馬鹿』発言を聞いて、哀しいオーラを纏いながらピクリとも動かなくなってしまった。

私達は不適切な発言をした当麻をしらーっとジト目で見る。

当麻的にはお友達感覚のジョーク感覚だったのだろうが、初対面の、しかも今時真つ黒な髪の真面目そうな少女に対していきなり馬鹿は酷い。

ここが私が中学生の時に妄想していた世界なら撃ち殺されても文句は言えないレベルだ。

「あー、いや違うんだ。言葉が足りなかった、『馬鹿だ、しかし何故そんな事を?』という一連の会話を円滑に進めるものであり、乱暴な言葉遣いは親愛の証で、決して悪意ある台詞ではない! それと業務連絡! そのシスターと青髪は後で顔貸せ、そんな目でこっちをみるな!」

うわーん! と沈黙に耐え切れなくなったように当麻は絶叫する。

なんていうか……必死乙です。

「やげぐさ」

と、ピクリとも動かなかつた姫神秋沙は不意にそんな事を言った。

「は?」

「帰りの電車賃。400円」

その言葉で思い出した。そういえば何故彼女は三沢塾から出てきたのだろうか。

自分から協力しているのだから逃げ出した訳ではなかつたはずだ。それなのに何故外出なんて……。

インデックスの優秀な頭脳でも、私の悪い意味で非凡な知能でも答えは出てこない。

まあ、全てが終わってから聞けばいいか。

「何故そこで真っ直ぐこつちを見る? ってかテメエ期待の眼差しを向けんじゃねえ!!」

少し考え事に集中してしまった二人の会話を聞き逃してしまつたみたいだ。いつの間にか姫神秋沙が顔を上げている。

うん、少し残念な大和撫子っばい。

確か帰りの電車賃が100円足りなくてやけぐいだっけ?

まあ、貧乏人の当麻には貸せないだろうなあ。よし、ここは私が貸してあげよう。

「……。美人に免じてあと1000円」

「うるせえ黙れ悪女！ 自分の顔を売ってお金にする性悪女は美人なんて呼べませんっ！ 大体貧乏学生の上条さんに会ったばかりの人間に貸せるお金なんてないだろうが！！」

性格の悪さは見た目に比例しないよ。むしろ美人は性格悪く育つから。

「はい、1000円」

「えっ」

ちょうどいい会話をしていたので財布から取り出して1枚の硬貨を差し出した。

当麻は驚きの声をあげ、反応に困っていたが、姫神秋沙は何の反応もせず「ありがとう」と言っただけを受け取る。

「インデックスさん？」

「……とうまっつてば私の職業忘れてるんじゃない？ シスターだよ？ シスターさんなんだよ？ 困ってる人を見捨てるシスターなんていないんだよ。100万とかなら無理だけどたかが1000円ぐらい」

「たかが1000円でも上条さんには重要なんですよおおお！！」

「ヒモみたいなものくせにうるさいんだよ。あれは貧乏^ま人のお金からではなくお金持ち（スタイル）から私が貰ったお金。だから使

うのは私の自由なんだよ」

「うぐっ
」

「うわー、カミヤんがダメな夫みたいや。完全にシスターさんの尻に敷かれとる」

「うるせえ！ テメエは黙ってる！！」

「ごちゃごちゃうるさい当麻と青ピを無視して私は姫神秋沙を見る。

しかし何故か彼女は100円を握り締めたまま動いていなかった。

もう、帰れるはずなのに何故だろう。まだ何か用があるのだろうか。

「あ
」

知っているはずなのに気付かなかった。知っているはずなのに気付かなかった。

「ッ
」

当麻もそれに気付いたようだ。

私が疑問に思い、辺りを見回すと、いつの間にか自分達のテープルを取り囲むように10人近い人間が立っていた。

全く気配がない、いる事に気付いても、目の前にいても気配が希薄で感じ取れない、そんな暗殺者のような人間達が誰にも気付かれ

る事なく側まで来ていたのだ。

「ありがとうね」

姫神秋沙は言った。そしてそのまま無音で席を立つ。

そして暗殺者集団のような無個性の『彼ら』の一人が姫神秋沙に道を譲るように一步下がる。

「え、あ、何だよ？ この人達って知り合いなのか？」

「……、ん。塾の先生」

少し視線を泳がせた後、姫神秋沙は即答した。おそらくヘタレンの寄越した迎えなのだろうが、正直に言う訳にもいかず、嘘を考えていたのだろう。

ちなみにこんな人達が塾の先生のスタンダードなら私は学園都市にある塾には絶対行かない。

「またねー、魔法使いさん」

通路を歩き一階へ繋がる階段へ向かっていた姫神秋沙にそう言つと、彼女ははじめて表情筋を動かした。

名乗っていない自称で呼ばれてビックリしたのだろう。

私は笑つ。そして決意する。

「……ばいばい」

姫神秋沙はそう言うと、そのまま振り向かず去って行ってしまった。

次は貴女が救われる番だからね。『ばいばい』じゃなくて『またね』で別れられる関係になれるまで待つてて。

ソレ(1000円)はその後でちゃんと返してもらおうから。

私は心の中で呟いた。

それから『彼ら』の姿が消えてから、青ピが呟く。

「けど、何で塾のセンセ(サラリーマン)が生徒の面倒見んねんな。小学校の生活指導やないんやし」

第二節 禁書目録は貸し付ける。(後書き)

ほぼ原作と変わらない事を書こうとしてもなかなかやる気が出ない件。

第三節 禁書目録は勝利する。

あの後、私達はゲームセンターやらショッピングモールやらいろんな場所で遊び倒した。

それから夕方の5時になった今、遊び疲れた私達にお別れの時間
がきた。

「ほななー、カミヤん。シスターちゃん」

「ばいばーい」

青髪ピアスがぶんぶんと小学生のように手を振るのを真似して私も同じように手を振る。

今日は楽しかった。だが、楽しい気持ちだけでは過ごせなかった。姫神秋沙救出大作戦をずっと考えながら遊んでいたのだ。

敵は自分の考えを現実に変える、なんてロベルト・ハイドンみたいな能力を持つ錬金術師。インデックスの昔のパートナー。ステイルと同じ、上条当麻になれなかった男。

吸血鬼を利用してインデックスを救おうとしているが、実際にインデックスは救われてしまっていて、それを知った彼は自暴自棄になり暴走してしまう。

自分の能力では不可能と思いつくヘタレだから倒すだけなら簡単だ。しかし私は叶うことなら彼も救ってあげたい。

けれどステイル達の時のようにはいかないだろう。証拠にできるものが私にはないのだ。

「むむむ……」

「どうしたインデックス？」

「……ちよつとね」

一瞬当麻に私の事を話してしまおうかと考えたがやめた。これは私だけが抱えて生きると決めた事だ。墓場にまで持って行こう。当麻ならうっかりステイル達に話すとかも有り得そうだし。

と、思っていたら私はあるものを見付けて立ち止まった。

「あ」

「あん？」

風力発電の柱の根元に、段ボールに入った子猫が一匹みーみーと鳴いている。

「とうま、ネ」

「ダメ」

「コ、と続けて言う前に当麻に割り込まれてしまった。

けれどそう簡単に諦める私ではない。私は猫が大が百個つく程大好きなだから。

「 「を飼う！」

「ダメ」

「ダメなんてダメ。捨てられてて可哀相だと思わないの！？ 迷えるキティちゃんは私の教会で飼うべきなんだよ！」

「ウチ学生寮だしペット禁止だしお金は あるけどとにかくダメ！！ てゆーかキティちゃんってもう名前つけてんのかよ！」

「とうまっつてばバカ！？ ハローキティで名前だと思ったのかもしれないけどKittyっていうのは子猫の事だよ？ バカなの？ 死ぬの？ だから成績悪いの？」

「うるさい！ とにかく飼わないったら飼わない！！！」

「Why don't you have a cat! Do as you're told!」(どうして猫を飼わないの！？ 言う通りにしなさいなんだよ！)「

「????? ……はっ！ ええい英語でまくし立てれば何でも言う事聞くと思つなよ！」

「…………じゃあ、いいよ」

「おっ、諦めてくれたか」

「飼わないととうまに監禁されてるって喚いてやるから」

「えっ、ちょ、インデックスさん？」

「3……2……い」

「参りました！ だから勘弁してください！」

路上にも関わらず、上条当麻は慣れた様子でジャンピング土下座を披露した。

勝った。

私は己の勝利を確信して子猫に近付いていく。

さあ、スフィンクス。新しいご主人様がきまし　　って、あれ？

「三毛猫じゃない……？」

抱き上げてみたそれはバリバリの日本産である三毛猫、インデックスがスフィンクスと名付けた子猫ではなかった。

「スコットランドの折れ耳猫？」

インデックスの中の知識を利用して、どう見てもそれにしか見えなかった。

灰色の毛並み、前方に折れ曲がりながら垂れた耳、短めの首、丸い顔と小柄な身体　　そう、スコティッシュフォールドだ。

「あん？　どうかしたのか？」

「う、うづん、何でもないんだよ！」

360度三毛猫ではない。インデックスと同じ連合国出身の猫のようだ。

でもおかしい。ここで見付けるのは三毛猫スラインクスのはずだ。

私はキヨロキヨロと周りを見るが他に猫はどこにもいない。このコ一匹だけだ。

「どうした？ インデックス。飼うのやめるか？」

「それはやめないけど……」

「ですよー」

バタフライエフェクト的な何かが私がインデックスの中にいる事に反応して世界を歪ませた？

腕の中でみーみーと鳴く子猫を見る。飼い主に捨てられて間もないのか、毛皮にあまり汚れはなく、人間に警戒心もないようだ。

インデックスではなく私だけの 本来なら存在しなかった子猫キャラクター。

「うん、決めた！ 私このコを絶対飼うんだよー！」

「はあ？ さつき上条さんを脅してまで飼う気満々だったのは誰ですかあ？」

「違うの！ そうじゃなくてそうだったのー！」

「……？ よくわかんねえけど……まあ、ちゃんと世話すんだぞ？」

「とうまの世話より優先するんだよ！」

「俺はペット扱いかよ！」

インデックスではなく私、スフィンクスではなくこのコ。私だけが知る私と同じ、私の仲間。

口元がニヤけてくる。けれど私はそれを止められない。

「……何笑ってんだ？」

「ふふん。とうまには関係ないもーん。ねー、アーサー？」

「……関係ないってなんだよ。てゆーかもつ名前を付けたのか？」

「うん、アーサー王からとってアーサー！ きつと気高き王のように育つんだよ！」

「そいつあ立派な猫ですねー」

私はアーサーの両脇を持ち、赤子をあやすよつに空高く持ち上げる。アーサーはそれに反応しみーみーと嬉しそうに鳴いた。

「アーサーかわゆすなんだ よっ！？」

「ん？ どうしたインデックス？」

「……属性は土、色彩は緑。この式は……地を媒介に魔力を通し、意識の介入によって……、もしかしてこれはルーン？」

近くで魔力の流れが束ねられている感覚を掴み、それを調べる。おそらく人払いの類いの魔術。そしてこれを使うのは当麻も私もよく知っている人間。

インデックスの知識は私が知らない情報きおくを頭に流していく。そして私の考えと知識も追加してある結論に至った。

「なんかあつたのか？」

「誰かが『魔法陣』を仕掛けてるっぽいんだよ！」

使用されている魔術は人払い。けれど使用用途はおそらく真逆の人（私）寄せ。

「はあ？ またアイツらみたいなとんでも魔術師が来てるってーのかよ？」

「みたいな　ではなく本人だよ」

私は調べに行く必要がないからこの場を立ち去らない。だって私も話を聞いて協力する気満々なのだから。

けれどそれはその魔術師にとって想定外なのだろう。原作のように彼は姿を現さない。

「本人？　なんでアイツらが？」

「それは本人に聞いたら？ ……ね、ステイル？」

私がそう言うと同時に地面を靴底で背後から踏み締める音が聞こえてくる。

私も当麻も後ろを振り向くが影に隠れてよく見えない。

しかしその姿もだんだんゆっくりと影から離れ、徐々に全貌が見えてきた。

それが口を開く。

「……参ったな。君がアレを調べている間に上条当麻に会いたかったんだが」

そこにいたのは身長二メートルを越す少年だった。

白色の肌を漆黒の修道服で覆い隠す神父。けれど神父に相応しい姿とは言えない。煙草と香水の混ざった匂い、長い赤色の髪、耳にはピアス、指には銀の指輪、右目の下には店で売られていますとアピールしているのかバーコードの形をした刺青が刻んである。

「お、お前は……」

「やあ、久しぶりだねインデックス」

「久しぶり、ステイル」

ステイル・マグヌス。ルーンの魔術を極めた若き天才、インデックスの昔のパートナー！

彼は不幸（厄介事）を持って、上条当麻の元へやってきた。

第三節 禁書目録は勝利する。(後書き)

スコティッシュフォールド超可愛い。スフィンクスではない事に意味はありますが、三毛猫でない事に意味はありません。つまり種類は作者の好み。

第四節 禁書目録は身構える。

赤い髪を靡かせ、煙草をくわえ、ステイルはいつも通りといった風貌で私達の前に立つ。

「なんだあ？ わざわざインテックスに会いに来たのか？ 神裂もいるのか？」

そんなステイルに気楽に話し掛ける当麻。本来なら炎の剣の一つや二つでも飛んでくるのだろうが、私がいるという事と当麻とステイルの関係の違いからそんな事は起こらない。

「僕が用があるのは君の方だ。神裂はいないよ。今回は僕一人だ」

なんて、知り合い以上友達未満ぐらいの、仕事上の付き合いレベルの返事が返ってくるだけだった。

私はそんな二人を交互に見てから口元を隠しニヤニヤと笑う。

「私に内緒で二人つきり？ 天に召します我等が父はそういう非生産的な事はお許しになってないんだよ。で、でも愛があるなら否定しないんだよ！」

そして「いやんいやん」と両目を押さえながら身体をくねくねと揺らす。

すると二人は声を揃えて「「違っ！！」「と叫ぶ予想通りの反応を見せてくれた。

そして一応否定した当麻だが、彼は「でも海外ってそういうの多いよな。もしかしたら……」とぶつぶつと呟きながらステイルから後退り距離を取った。

「おい上条当麻勘違いするな！ 僕はお前なんかに、男なんかに微塵も興味ない！ 僕が好きなのは」

「か、勘違いしないでよねっ！ ってテンプレ的なツンデレっぽいんだよ」

「か、上条さんは悪いけど貴方様の期待には応えられないのですよ！？」

「だから違う！ インデックスも話をややこしくしないでくれ！」

シリアスに登場したのにしまらないステイル。原作では結構格好良い噛ませ犬だったけどそうはいかない。私は敵も味方も全員ギャグキャラなコミカルを望む。そんな平和が好きなのだ。

「ハアハアハア……、話が進まないから君は少し黙っていてくれないかい？ 出来れば君には聞かせたくないが君は従ってはくれないだろう？」

ステイルは荒くなった息を整えてそう言った。私はそれに「もちろんなんだよ！」とサムズアップ。

ステイルは「やっぱりね」と頭を抱え、静かに溜息を吐く。

それから真剣な表情になり、真剣な空気を纏い、口を開けた。

「行け（E h w a z）」

その声と同時にステイルは手に持っていた大きな封筒を人差し指で弾いて当麻の元へ飛ばした。分厚い封筒はまるでフリスビーのようになるくる回りながら軽々と宙へ浮かび、そのままゆっくりと当麻の手元へ収まった。

私は当麻の元へとことこと歩いて近付き、当麻の横から覗き込むように背伸びをしながら封筒を見上げる。

「受け取るんだ（G e b o）」

ステイルの言葉に反応し、封筒の口に刻まれていたルーン文字が光り、その封が刃物で切ったように真横に裂けた。それからぱらぱらと書類が当麻と私を囲むように飛び出す。

「『三沢塾』って進学予備校の名前は知ってるかな？」

ステイルがそう言うと膨大な書類の一枚が当麻の目の前にふわふわと浮かぶ。

「みさわ……？」

「あー昨日二時間しか寝てないからきついわーなんだよ」

「いや、それは違うだろ」

当麻にツッコミを入れられて私は舌を出しながらへつと笑う。地獄のミサワを教えるうざい塾があったら面白いと思うんだけどなあ。

「一応、この国ではシェア一位を誇る進学予備校だけど君達には関係ないようだね」

記憶を失っていないくても上条当麻は大学受験などには興味ないのだからそんな知識あるはずがない。もし聞いた事があっても当麻はすぐに忘れる。だって当麻はバカだから。

私は私でそんな当麻ぐらいしか話す日本人がいないし、学校自体行っていないのでそういう知識が手に入る事はない。

「……で、その『みさわじゅく』がどうしたんだ？ インデックスをその進学予備校に通わせるのか？ 小学校の方が先な気がい
てえっ！！！？」

「中学校の間違いだよアホとつま？」

「は、はいつ、すいま、せんっ！」

何か不愉快な事を言い出した当麻の足をおもいつきり踏ん付けて私は笑顔で彼の間違いを指摘する。当麻は足をぶらぶらと振り飛び跳ねながら謝罪した。

「君達はいちいち漫才をして話の腰を折らないと気が済まないのかい？」

ステイルは呆れ顔でそう言った。私達は先程の行動から否定できずに黙り込む。

ステイルはそんな私達の反省した様子を見て溜息を吐いた。

「先程の問いに答えよう上条当麻。三沢塾に女の子が監禁されてるからそれを助けに行くのが僕の役目なんだ」

そして見た目に反する正義の味方のような台詞を口にする。

当麻と私は自分達を囲む紙吹雪のように舞う資料を見た。

隠し部屋がある事がわかる見取り図。明らかに料金が合わない電気料金表。建物の中にいる誰かに買い込んだ食料品を与えている事がわかる出入りする人間のチェックリスト。そして三沢塾のビルに一ヶ月前に一人の少女が入って行くのが目撃された資料。その少女の学生寮の管理人曰く、彼女はそれから一度も部屋に戻っていないらしい。

「三沢塾ってのは科学崇拜を軸にした新興宗教と化しているんだそうだ」

「科学崇拜……？ って、あれか？ 神様の正体はUFOに乗ってやってきた宇宙人とか、聖人のDNAを使ってクローンを作ろうとかっていう……？」

「教えについては不明だけどね。それに正直、三沢塾がどんなカルト宗教に変質しているかが知った事じゃないんだ。現在はもう潰れている事だしね」

「……？」

「簡単に言おう。今の三沢塾は乗っ取られたのさ。科学かぶれのインチキ宗教が真正正銘、本物の魔術師 いや、チューリッヒ学派

の錬金術師にね」

「それでステイルが処理しに来たって事？」

「ああ。ただその錬金術師を処理するっただけじゃ済まないだろうけどね」

私の問いに答えた後ステイルは露骨に嫌そうな顔をする。まあ、気持ちわかる。『アレ』が関わるかもしれないなんて考えたらインデックスではない私は平気でも、私の中にある知識インデックスを自分に合わせた私は全く平気ではない。

見た者はいない。出会う事は死亡前提の化け物。私も正直出会わないとわかっていなければ逃げたくなる。

「錬金術師自体はさほど重要じゃない。それだけならばぱっと行ってさっさと片付けられるからね」

ステイルの話は続く。

「重要なのはその錬金術が三沢塾を乗っ取った理由さ。一つは簡単だ。元々ある要塞システムをそのまま再利用したいと思っただろうね。生徒じゃのほとんどは校長きょうの首がすぐ替わってる事にも気付いていないはずだよ。けどね」

ステイルは小さく息を吸い込む。

「錬金術師のそもそもの目的は三沢塾に捕らえられていた吸血殺し（ディーブブラッド）なんだ」

吸血殺し。幻想殺しのような範囲の広い能力ではなく、極めて限定的な能力。基本的に無意味で無価値な能力だが『ある生き物』に對しては絶大な威力を誇る科学よりも魔術に深く関わる能力。

「元々、三沢塾では巫女としての役割を持たせるために監禁していたらしいけど。ま、女をダシレベルに位の高いモノを呼び出すって言うんだから巫女で間違いないと思うけどさ」

「……………」

「かねてから吸血殺しを狙っていた錬金術師なんだけど、一步先に三沢塾が吸血殺しに辿り着いた訳だ。いや、ヤツにしても面倒だったはずさ。誰にも気付かれずに吸血殺しを奪って学園都市から逃げはすの計画が三沢塾が動いたせいで全部水の泡になったんだから」

「つまり三沢塾から強引に手柄を奪い返したって訳なの……………か？」

私が識っている話が続く。けれど私はいつものように聞き流したりしない。彼女を助ける為に知識はいくらあっても足りない。彼も助けるならより多くの情報が必要だ。

「そうだね。錬金術師にしてみれば、吸血殺しの獲得は悲願だろうからね。……………いや、それを言うなら全ての魔術師の悲願か。あるいは人類全ての、かもしれないけど」

「……………？」

当麻は何を言っているのか、何を言っているのか理解できない表情をしているが私にはわかる。それは彼にとっても魔術師にとっても特別で、人類全てにとっても特別な意味を持っている。

「あれは『ある生き物』を殺す為の能力なのさ。いや、それだけじゃない。実在するかどうかもわからない『ある生き物』を生け捕りにできるかもしれない唯一のチャンスでもある」

当麻はまだわかっていないのか困惑した表情をしている。

「ある生き物っていうのはね、僕達の間じゃカインの末裔なんて隠語が使われているけれど」

カイン 旧約聖書の登場人物で最初の人類であるアダムとイヴの長子。人類最初の殺人者にして人類最古の嘔吐き。

「簡単に言えば、吸血鬼の事だよ」

ステイルは小さく笑い、それこそまるで内緒話でもするかのような声でそう言った。

第四節 禁書目録は身構える。(後書き)

更新遅くて申し訳ないです。12月って割と忙しい季節ですよ、ね、ふあつく。過労と睡眠不足がやばい、だみいっとう。一日20時間ぐらい眠れる生活がしたいなあ、しつと。

第五節 禁書目論は怯える。

「お前、それ本気で言ってるのか？」

ステイル・マグヌスの言葉に対しての上条当麻が返した返事はそれだった。

当麻なら いや、現代人なら誰でもそう思うのは当然だ。インデックスではない私が友人に『吸血鬼を生け捕りにできるチャンスだぜ』なんて言われたら千の言葉を使って小ばかに罵倒する。

吸血鬼。有名なのはブラム・ストーカーの恐怖小説『DRACULA』やシエリダン・レ・ファニユの怪奇小説『Carmilla』などの創作物などがある。

『DRACULA』の元となったルーマニア独立の為に戦った英雄『ワラキア公ヴラド3世』を初めとした残虐な行為をした人間や犯罪者を吸血鬼と呼ぶ場合もある。

身近なものでは吸血病や好血病と呼ばれる人獣問わず血液を好む病気、なんていうのもある。

蝙蝠、狼、鼠、霧など様々なものに変身し、人の生き血を啜り、発達した長い犬歯で噛んだものを手下に変え、魅了の魔眼を持ち、強力な魔術も扱える怪力で更に不死身。伝承で伝わる吸血鬼は、不死者の王はまさに『化け物』と呼ばれる存在だ。

ちなみに関係ない話だが性交未経験者が噛まれれば吸血鬼に、経験が有る者が噛まれればグールになるらしい。

そんな吸血鬼には十字架や太陽光、聖水、香草、銀など弱点と呼ばれるものがたくさんあるとされているが『十字架が描かれた棺桶で寝るのにそれはおかしい』や『身体能力が高いから、目や鼻が良いから太陽や香草が苦手と伝えられた』など否定されたり曖昧なものである。

つまり今回、もし吸血鬼が関わるのなら曖昧な弱点を頼りに出会えば襲い掛かってくる『化け物』とも戦わなければいけないということだ。

私としては『そんなの信じてんの？』とか当麻と一緒に呆れたい。インデックスとしてもいるかどうかかわからないものを信じる気持ちにはなれない。

けれどインデックス（わたし）は別だ。姫神秋沙の能力も過去も知っている私にはステイル以上に今回の件に緊張感を感じざるおえない。

「……、冗談で言っただけの内は、幸せだったんだけどね」

ステイルは歯を食いしばって当麻から視線を逸らした。ルーンを極めた天才魔術師は私と同じく何かに怯えるような態度をとる。

「吸血鬼を殺す能力が存在するなら逆説として『殺されるべき吸血鬼』がいなければ話にならない。RPGで勇者に対して魔王がいるように正義の味方の為の不義の味方、みたいな悪循環だけどね、こればかりは絶対だ。……僕だって、有り得る事なら否定したかった」

「……って、何だよそれ？ そんな絵本みてーな吸血鬼がまさかホントにいるってのか？」

「当麻はもちろん信じてはいない。」

だが、完全に嘘と断定するには、いつものようにステイルを馬鹿にして冗談を言って笑い合うには彼の雰囲気は深刻過ぎた。

「それを見た者はいない」

ステイルはそのまま口を開く。

「それを見た者は死ぬからだ」

そして自信満々に冗談みたいな事を告げた。

「……………」

当麻は私にちらりと視線を向ける。

そして私の表情を見て、彼が今まで浮かべていた薄ら笑いは消えた。どうやら今の私はよっぽど真剣な表情をしているらしい。

「もちろん僕だって鵜呑みにしている訳じゃないけどね。誰も見た者はいないのに伝承として伝わり、伝説として詳細が残っているのはおかしいだろ？ ならどうやって知ったんだって話になるからね」

ステイルは誰も見た事がないのに誰もが知っている事を軽く笑う。

けれど今の私には普段なら笑えるその戯言を楽しく笑える余裕は

ない。

「でもね、誰も見た事がない、なのに吸血殺しの存在がそれを証明してしまった。それが問題なのさ。相手がどれだけ強いかも分からない、相手がどれだけの数なのか分からない、相手がどこにいても分からない。分からない分からない分からない、分からないモノには手が出せない」

知っているか知らないかというのは実は重要な事だ。

例えば「いつまで走ればいいのか分からないマラソン」と「予めゴールが分かっているマラソン。どちらが精神的に楽かなんて分かりきっている。

例えば「有名な実力者」と「無名な実力者」。球技みたいなスポーツでもボクシングみたいな格闘技でも好きに考えていい、実力が分かる相手と実力が分からない相手では同じ実力でも同じ状況でも内容や結果が変わるのは当然だ。

情報は黄金よりも価値がある。戦力差を理解している戦争なら劣っているても勝利を収める事ができる。

人間は未知のモノに怯える生き物だ。「肺炎」と「全く同じ症状で全く同じ治療で治る原因不明な病」では全く同じでも後者の方が不安になる。

存在するのかどうか、出会った場合何をすればいいのかどうかも分からない未知の存在。その存在が証明されてしまった。だからステイルは怯えている。

恐怖のみ知っているインデックス（わたし）は更に怯えている。

「けど、分からないモノには同時に未知の可能性があるのさ」

ステイルはシニカルな笑みを見せる。

未知の存在だからこそその未知の可能性。人間にとって害悪な存在マイナスを有効に使う。『バカとハサミは使いよう』なんて言うが役立たず（ゼロ）ではなく存在するだけで自分を害するモノをウイルスを使ってワクチンを作るように利用する。そんなとんでもない発想まで至ってしまったのが件の錬金術師だ。

「上条当麻、君は『セフィロトの樹』という言葉には……覚えがあるはずないね」

「……、んな事言われたって傷はつかねーけどな」

そう言いながらも悔しいようで当麻は露骨に拗ねたような表情をする。

「『セフィロトの樹』っていうのは神様、天使、人間なんかの『魂の位』を記した身分階級表の事なんだよ。ユダヤ教の密教、神秘主義思想のカバラで使用される図象の一つであり、カバラの奥義かも。精神を高める事で神に近づく事ができるって考えで、人間の本来の姿である神人間アダム・カドモンに至るまでの道のりは開けているんだよ。けれど

「

「つまりどういう事だつてばよ？ もっと簡単に説明してくれねーか？ カバラとかアダムがどうのこうの言われても俺にはさっぱり理解できねーよ」

私はステイルに割り込んで自慢するように知識を披露したが、残念ながら上条当麻の脳力を考慮するのを忘れていた。

識っているから説明はできるが自分なりに解釈して応用して解説する事は私には難しい。だから私は当麻の言葉に対して困る事しかできなかった。

そんな私を見兼ねて出番を奪われたステイルがまた口を開く。

「簡単な事だ。どんなに努力しようが、どれだけの才能があるうが『人間』は『人間』、限界というのが定められているから最高にはなれてもそれより上にはなれないのさ。RPGの勇者も神様にレベル100までしか成長できないって限界を設定されているだろう？」

「なるほど。そういう事かよ」

ステイルの説明はわかりやすかった。専門的な言葉を使って知識をひけらかしていた私のモノとは違い、馴染み深い例え話を使って教師のように説明した。

「……で、その『セフィロトの樹』とか『人間の限界』ってのが何なんだ？ それが何か関係あるのか？」

「僕が言いたいののはね、人間には“どれだけ努力辿り着けない高みがある”、けれど……それでも上に登りたいのが欲望深き人間だ。辿り着きたいと思うからこそ魔術師だ。なら、どうすれば良いか」

ステイルはここで一旦区切る。

そして、

「簡単さ、人間以外の力を借りれば良いだけだ」

当然の事のようにそう言った。

「吸血鬼つてのは不死身だからね。えぐり出した心臓を魔剣に組み込んだって生き続ける。差し詰め生きる魔道具って感じかな？」

私は頭の中で触手のよいにうねうねと刀身が動く醜悪な剣を思い浮かべる。黒や紫や緑などをごちゃまぜにしたえげつない色彩で持ち主に寄生するような気持ち悪い剣を想像する。

何かの命を生きたまま、生贄のように使われた道具なんて想像しても醜い姿しか思い浮かばない。化け物を使った道具だなんて化け物のように醜くなった姿しか考えられない。

利用しようなんて気分には、私はなれない。けれどそんな考えに到達してしまった人間がいる。

「事の真偽は関係ない。そこにわずかな可能性があるならば、それを試すのが学者という生き物だ」

ステイルが言いたいのはこうだ。

吸血鬼、なんてものが実在するかどうかは“関係ない”。ようは、それを信じて事件を起こしてしまった人間がいる、そして事件が起きた以上誰かがそれを解決しなければならぬ。

そしてその解決しなければ人間というのがこの場にいる人間なのだ。

「それじゃあ、結局吸血鬼なんてのは『いるかどうか分からない』ままなのか？」

「元々『あるかどうか分からないモノ（オカルト）』を扱うのが魔術師の仕事だからね。三沢塾や錬金術師も本気みたいだよ？ 本気で吸血鬼と交渉をしようとしている。そのために切り札が必要だから吸血殺し（ディープリッド）なんてものが入用なのさ」

「……………」

「それと、吸血殺しの過去を知ってるかい？ あの子は元々京都の山村に住んでいたらしいけど、村はある日全滅したそうさ。最後に通報した人間はよほど錯乱していたらしく、化け物に殺されると言ったららしいけどね。それで駆け付けた人間が見たものは無人の村と、立ち尽くす一人の少女。村を覆い尽くすように、吹雪のごとく吹きすさぶ白いはいだけだった、って話さ」

日光を浴びれば『灰』になる。心臓に杭を刺せば夥しい血を流して死ぬなんて話よりも有名な、吸血鬼の有名過ぎる話だ。

状況証拠としては十分。存在していたはずの人間が大量に消え、現場には大量の灰以外一人の少女しか存在しない。

これが魔術のない世界（現実）なら犯人は少女で『吸血鬼大量殺人事件』などとゴシップ記事に書かれていた事だろう。

しかしこの世界には魔術や天使が存在する。吸血鬼だけは存在しないなんて証拠もないのに否定できはしない。

「確かに吸血鬼なんて『いるかどうかも分からないモノ』なんだけどさ……良く考えてご覧よ。吸血殺しとは『吸血鬼を殺す力』だ。ならば、まずは吸血殺しは吸血鬼と出会わなければならぬ。是が非でも吸血鬼に遭遇したいと願う者なら、まずは吸血殺しを押しえておくに越した事はないんじゃないかな。……もっとも『吸血鬼を殺すほどの絶大な力』の持ち主をどう制御するかは大きな問題だとは思っけどね」

ステイルは知らない事だが『吸血鬼“も”殺すほどの力』ではなく、『吸血鬼“を”殺すだけの力』だから制御自体は単純なのだけどね。

そういえば当麻の幻想殺し（イマジンプレイカー）に触れると吸血鬼はどうなるのだろうか。能力者や魔術のように触れられている間は能力を使えないだけだろうか。

某アニメの魔法少女の魂の結晶に触れたらどうなるのだろうか。魂という概念は現実だから幻想殺しでは壊せないのだろうか。

一度気になり出すとどんどん気になっていく。

私の想像では『上条当麻の認識で変化する』と考えている。

異能の力なら打ち消せるが異能の力で発生したものは打ち消せない。打ち消せるなら一方通行戦で一方通行が飛ばした鉄骨を回避したりする必要はない。

けれど漫画版の『超電磁砲^{レールガン}』では超電磁砲のコインを受け止めた
そうだ。

原作ではないから無関係とは考えられない。だから私は『上条当麻の認識で変化する』と『幻想殺し』は『現実殺し』となる可能性がある
があると考えている。そしてその為にアレイスターは上条当麻を成長
させているのではないかと妄想している。

でも答えは私にはわからない。答え合わせしようとしても答えを出せる自信はない。だから何もしない。

私は当麻の方を見る。彼はステイルの話した非現実的な話に混乱しているのか困惑しているようだ。

そしてそんな混乱する話をさっさと終わらせたいからか当麻は、「で、さっきからさんざん意味不明な話やってっけど、お前結局何が言いたいんだよ？」

と結論を出させる質問を投げかける。

「ああ、そうだね。お互い時間はない、さっさと済ませよう」

ステイルはうんうん、と二回頷く。言葉や仕草だけなら普通だが、2メートルの巨漢のそんな仕種はあまり可愛らしいものではない。

「とまあ、端的に言っつて、僕はこれから三沢塾に特攻をかけて吸血殺しを連れ出さないとまずい状況にある」

うん、と当麻も頷いた。自分には関係ないと言いたいような感じ

だ。

けれど、

「簡単に頷かないで欲しいね。君だって一緒に来るんだから」

上条当麻“は”今回の件に関わらなければいけない。

第五節 禁書目論は怯える。(後書き)

童貞チェリーと処女ヴァージンは吸血鬼ブレイホーイに非童貞ブレイボーイと非処女ブレイガールはゲールになるという情報を知った時は吹き出しました。神聖な身体の人間がより邪悪な化け物になるとかなんて皮肉でしょうね。

ちなみに吸血鬼と言えばドラキュラ伯爵のイメージが強いせいか男が多いイメージがあるのですが、男の吸血鬼は異性を、女の吸血鬼は同性を好むそうです。それなのに増えない女吸血鬼……つまりそういう事です。

でも女を求める童貞だった男吸血鬼って面白いですね。百合な女吸血鬼の方が趣味的には好みですけど。

そういえば獲物を引き寄せる為に吸血鬼は美しい外見をしている、なんて真偽不明の情報もあるのですが吸血鬼化すると美形になれるのですかね？

久しぶりの更新なのでいつもより2000字多めにしておきました。と、言ってもまだ三沢塾にすら行ってないのですが。

……一方通行が大好きなので早く第三章まで書き進めたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1176y/>

完全記憶能力（禁書目録）があろう（になろう）とバカはバカ

2011年12月16日02時51分発行